

「ヴィンランド」の所在地はどこか

— ヴァイキングによるアメリカ大陸の発見をめぐる —

Where did “Vinland” exist?

— Over Discovering American Continent by the Vikings —

伏 島 正 義

第I章 はじめに

西暦一四九二年はコロンブスが現在のバハマ諸島の一つ、サン・サルバドルと後に命名された島に上陸した年とされている。これは、ヨーロッパ人が北米大陸へ上陸した最初の出来事であったとされている。しかしこれについては異見がある。すなわち、西暦一〇〇〇年を数年遡るころ、レイフ・エリクソン (Leif Eiriksson) が、「ヴィンランド (Vinland)」と名づけられた北米大陸の一角に上陸した、とされるのである。双方の見解の間にはおよそ五〇〇年間の隔りがある。レイフ・エリクソンが活躍した時代は、北欧史に則していえば、いわゆる「ヴァイキング (Viking)」時代^①に当るものであり、それはその活動の一環であったとされる。本稿は後者の所説をめぐる、その議論のあらましを辿ってみる。

ところで、ヴァイキング時代とは、その活動が次に示す、七九三年に起きた事件を象徴とする年代から始まり、一一世紀中頃以後、次第に消失してゆく時代を指すことが慣習となっている。すなわち、七九三年六月八日の事件とは、ヴァイキングが

イギリス、ノーサンブリアの沖、別名ホーリー島のリンデスファーン (Lindisfarne) 修道院を襲った事件であり、『アングロ・サクソン年代記 (Anglo-Saxon Chronicle)』には次のように記されている。

「この年、ノーサンブリア地方全域に切迫した前兆がいくつも現われ、人々を激しく脅した。これらの前兆は巨大な竜巻と閃光とからなり、おどろおどろしいドラゴンが空を行くのが見えた。そして、まもなく大飢饉が訪れた。そのすぐあと、同じ年の六月八日には、異教徒たちが来襲して無残にもリンデイスファーンの神の教会を破壊し、略奪と殺戮とをほしいままにした。」^②

この事件について、当時シャルルマーニュ大帝の諮問官として大陸にあった、ノーサンブリア出身のアルクイン (Alcuin) はその知らせを受け取り、数回にわたって応答した。その一通の書状では次のように描かれている。

「われわれとわれわれの祖先たちが、このもっとも美しい地に住みついてよりかれこれ三五〇年ほどになりますが、その間今日異教の徒のために蒙っているかくのごとき恐怖が、ブリタニアに姿を現わしたことは一度たりとありません。ましてや海からの襲撃など、思いもよらぬものであります。」^③

ところで「ヴァイキング (Viking(r))」の語源については定説はない。一般に“vik (入り江、湾)”は“wig (戦闘)”にも通じ、“vik”に出入りし、あるいは“wig”に携わる人々、あるいはより具体的に“vikens”地方 (オスロ湾) (出身) の人々という意味に解されている。さらに語源的には、乗組員の規模あるいは距離の単位に関するとの解釈もある。通常“ヴァイキング”と呼称されるかれらは、しかしながら、かれらがかかわった地域の人々によっては次のように互いに異なった呼称が与えられた。たとえばアングロ・サクソン人は総称して“Danis”、ザクセン人は“Ascmanni (とねりこの民)”、アイルランド人は“Galli (異国人)”、あるいは“Lochlannagh (北方人)”と呼び、とくに「黒」あるいは「白」の語をつけてデンマーク人とノルウェー人を区別した。但し、「黒」「白」という皮膚の色によって区別したというのは、歴代の年代記作者による誤りであって、当時の人々は「新」「旧」それぞれの異邦人として双方を理解していたのが事実である、という見解がある。

スペインのアラブ人は“Majus (異教徒)”, スラヴ人、アラブ人、ビザンツのギリシヤ人は“Rus”、“Ros”、あるいは“Veringjar” と呼び、ロシアのネストル (Nestor) は“Svein” などとも呼んだ。ところで、そもそもヴァイキングは略奪集団であったのか、平和的な取引に携わりあるいは移住する集団であったのか。その本質的性格に関しても議論は尽きない。^④

第二章 ヴァイキング活動の概要

かれらの活動は、通常かれらがその対象とした地域にしたがって分類され、南方ルート、東方ルート、北方ルートなどと、便宜的に分けられている。それぞれのルートにおいてかれらが残した足跡を簡単に触れておく。

《アイルランド》

アイルランドに向けた遠征は主としてノルウェー・ヴァイキングによるものであった。ヴァイキングによる襲撃の嚆矢は、スウェーデンのヘルイュー (Heliö) で発見された笏杖によって窺うことができる。つまり、これはかれらがアイルランドからおおよそ八世紀ころ略奪したものと考えられている。^① 襲撃の具体的年代をいえば七九五年スコットランドのアイオナ島 (Iona) の聖コロンバ (St. Columba) 修道院が略奪され、ついでダブリン北方海上ランベイ島 (Lambey Island) リール (Rechnu) 修道院が襲われた。当時の事情を記録した年代記『イニスファールレン年代記 (Annals of Inisfallen)』は七九六年 “Geinte (ヴァイキング) の襲来を告げ、八二三年に続いて八二四年には、

「スケレク (Selec) は異教徒によって略奪され、エトガル (Etagal) は捕囚として連れ去られ、かれらの手中で飢えによって死亡した。」

と記述している。^②

アイルランドへの全般的攻撃は九世紀初頭（八〇七年）から開始された。すでに八二〇年には、

「大洋はエリン（アイルランド）に異国の民の洪水を注ぎ込み、ヴァイキングと海賊の艦隊の見られない港、上陸地、投錨地、城砦、防塁はなかった。」^③

と『アルスター年代記 (Annals of Ulster)』は記述している。さらにある年代記によれば、

「彼らは島の首長の住む所や、崇拜すべき教会や聖物をあますところなく掠奪し、聖遺物箱や聖遺骨や凶書を破壊し、荘厳化された神の殿堂を破砕した。これらの狂暴にして野蛮、異教にして無慈悲・惨酷の徒は聖堂に対していささかの畏敬も慎みも知らず、彼らは人をも神をも恐れることを知らなかった。要するにアイルランドのことごとくが、男女、老若、聖俗を問わず、自由民たると農奴たるとを問わず、屈辱と暴行と抑圧とを彼らから加えられた。その数々を数え立てるとならば、浜の真砂の数よりも、野の草の数よりも、空の星の数よりも、数え難しとしたであろう。」^④

したがって、ノルウェー・ヴァイキングたる「ロ克蘭戦士」の攻撃止む一瞬は無上の安らぎであったであろう。聖ガレン (St. Gallen) 修道院のあるケルト語写本は、

「今夜風はほえ狂い、海の白き髪をかきむしる。猛々しきロ克蘭の戦士がアイルランドの海を荒しまわるのを、今はおそれる必要はない」^⑤

と詠んでいる。

ヴァイキングによる襲撃は以後頻繁に行われている。その概略を辿れば、八三九年ノルウェーからは伝説的人物であるトゥルゲイス (Turgeis) が侵略し、八五〇年にこんどはデーン人がダブリンを襲撃した。八五三年ノルウェー人のオラーフ (Olaf) はデーン人を駆逐し、それから後一八年間占領した。オラーフを継承したイヴァル (Ivar) が没して（八七四年）からも、八七七年にはハルフダン (Halfdan Ragnarsson) が攻撃をかけてきた。但し、それは失敗に終わり、その後（九〇二年）概して九一四年ころまでダブリンは比較的平和であった。その後ふたたびヴァイキングによって支配権が樹立されはしたものの、

一〇〇二年にはアイルランドの小王ブライアン・ボル（Brian Boru）によってアイルランドの統一が果され、およそ一〇年間には平和がつづいた。しかし一〇一四年四月二三日に起ったダブリンの北クロンターフ（Clontarf）における戦闘は、小王ブライアンを中心とする勢力とオークニー諸島を治めるシグルド（Sigurd the Stout）を中心とする勢力とが衝突する激戦であった。この戦闘の様子は次のように語られている。

「一言にしていえば、たとえ一つの首に一〇〇柱の堅い鋼鉄製の頭があり、それぞれの頭に一〇〇枚の鋭く、すばやく、冷やかにして錆びつくことのない黄銅の舌が備わり、そしてそれぞれの舌からは一〇〇個の饒舌で、騒がしく、倦むことのない声を発するとしても、老若男女、身分の上下、聖俗を問わず、あらゆるアイルランドの人々が、これらの無謀で狂暴な、全くの異教徒の異邦人から、すべての家で被った苦難、傷害、虐待を詳述し、物語り、数え上げ、告げることにはできなかった。」〔外国人（ヴァイキング）とアイルランド人の戦い（Cogadh Gaedhel re Gallaibh）^⑧〕

この戦闘^⑧では両陣営を代表する人物は双方とも戦死し、そのいわば漁夫の利を得たのは、デーン人で九〇〇年代初頭この地に支配権を確立したオラフ・クヴァラン（Olaf Kvaran）、その息子シグトゥリック（Sigtrygg Silk-beard）であった。かれはその後二〇年間支配することとなった。つまりアイルランドはヴァイキングにとって都合の良い侵略対象地であった。

▲イングラランド▼

七九三年リンデスファーン修道院が略奪されたことについては前述した。しかし、すでにその四年前（七八九年）にウェセックスのベオルフリック（Beorhtic of Wessex：七八六―八〇二）の治世の頃、ドーセット沿岸ポートランド（Portland）で事件の発生していることを『アングロ・サクソン年代記』は伝えている。つまり三隻の船で訪れたヴァイキング（デーン人あるいはノルウェー人）は、かれらと宮廷まで同行しようとした廷吏をいきなり殺害したのである。^⑨これは当該地域に対する襲来の前兆であった。七九四年にはジャロウ（Jarrow）およびモンクウェアマウス（Monkwearmouth）の二つの修道院が

襲撃された。なお、イングランドに遠征した主なヴァイキングはデーン人である。八三五年テムズ川河口への遠征以後、幾度となく侵略が敢行されることとなった。たとえば、かれらはイギリス海峡を南下し、八三八年にはコーンウォールに上陸し、ウェセックスを攻撃した（しかしこの時は撃退された）。八五〇年イングランド東南、ケントのサネット島(Thanet)で、および八五五年シェピイ島(Sheppey)でそれぞれヴァイキングが過した越冬はその先駆であった。かれらはまた八五五年にはセヴン河(Severn)からの侵入を試み、八六一年にはウィンチェスター(Winchester)を占領した。八六六年にはイースト・アングリアに根拠地を設け、イングランド征服を試み、翌八六七年にはノッティンガム(Nottingham)を制圧した。八六八年から八六九年の冬はヨーク(York)で、八七一年から八七二年の冬はロンドンでそれぞれ越冬した。八七四年はヨークを中心に確固たる植民を開始した年でもある。八七八年アルフレッド大王(Alfred)とグズルム(Guthrum)がウェドモア(Wedmore)で結んだ協約、つまりイングランドの北部および東部の多くの部分をデーン人の領土として認めるデーンロウ(Danelaw)は、おおむね既成事実に法的根拠を与えたにすぎなかった。八九二年にはフランスから侵入したヴァイキングの攻撃に晒された。九〇〇年代にはいつてからもアイルランドから侵入したノルウェー・ヴァイキングの襲撃なども重なり、その後も複雑で厳しい戦役が展開された。しかもイングランドの王、エセルレッド二世(Ethelred II)の統治年代(九七八—一〇一六)の九八〇年頃より、デーン人の侵略は再び激しくなった。とりわけ、一〇〇二年同王によって命ぜられたデーン人の虐殺に端を発したデーン側からの猛反撃と、その頂点として一〇一六年デンマーク王であったクヌード(Knut)が全イングランドの国王として即位したことは特筆すべき出来事であった。それ以後一〇三五年までイングランドはクヌード帝国の一部として組み込まれることとなったのである。しかし、その後ハロルド一世(Harold I)、ハルデクヌード(Hardeknud)があいついで即位したものの、後者の死後デーン支配はここに終焉した(一〇四二年)。

《ドイツ・フランスなど》

八二〇年デンマーク・ヴァイキングはフランドル地方やセーヌ河口を攻撃した。八三四年にはリースランド地域を荒廃させ、ユトレヒト (Utrecht) を經由してドレストアド (Dorestad) を略奪し、破壊した。それ以後八四〇年まで毎年のごとくリースランドの町や村々を襲撃し、略奪した。さらに八四一年セーヌ河口に侵入し、ルアン (Rouen) を焼き払った。八四二年ドレストアドおよびクヴェントヴィク (Quentovic) を荒廃させ、八四三年には六七隻の船に分乗したかれらは、聖ヨハネの祝祭に集まったナント (Nantes) 市民の殺戮を行った。他にボルドー (Bordeaux)、『リモージュ (Limoges)』、『ペルギュー (Perigieux)』も八四七年、八四八年に攻撃された。ヴァイキングは次第に内陸部にも進出し、たとえば八四五年数百隻を擁してエルベ川を遡航し、ハンブルグ (Hamburg) を略奪し、焼き払った。ヴァイキングはまた、次第にフランドルやフリースランドを越えてロトリンゲン、プロヴァンスにまで進出し、荒らした。かれらの襲撃行為は当地の人々にとっては恐怖であったこと以上に、この世に夢想だにしない、信じ難き驚愕であったことを、当時 (八五六年。実際は八四五年か) のラドベルトス (Paschasius Radbertus) は吐露している。^⑩ 同様にノアールムーティエ (Noirmoutier) の修道僧エルメンタリウス (Ermentarius) は、八六〇年代に、フランス西部の大半にわたって破竹のごとき勢いで行われた数々の蛮行について記述している。

「船の数は増え、際限なきヴァイキングの洪水は大きくなるのをやめようとしなさい。至る処でキリスト教徒は大虐殺、火災、略奪の犠牲者である。ヴァイキングは自分たちの前にあるすべてのものを荒らし、誰も反抗することができない。彼らはボルドー (Bordeaux)、『パリグー (Periguerux)』、『リモージュ (Limoges)』、『マングーラム (Angoulême)』、『トゥールーズ (Toulouse)』を奪取する。アンジェ (Angers)、『ツール (Tours)』、『オルレアン (Orleans)』は無人の地となった。船は航海を重ねながらセーヌ河を遡り、そのあたり全てに悪魔が栄える。ルーアン (Rouen) は荒され、略奪され、焼け落ちた。パリ (Paris)、『ボーバー (Beauvais)』、『モー (Meaux)』は敵の手に渡り、『メルン (Melun)』の砦は崩れ落ちた。シャート

ル (Chartres) は占領された。エブルール (Evreux) とバーユー (Bayeux) は略奪された。すべての町が包囲された。^⑩その後およそ二〇年を経過した八八四年においても依然として、サン・ヴァスト (Saint Vast) の年代記作者は次のように記述している。

「ノルマン人はキリスト教徒を殺害し、捕虜にしてやまず、絶えることなく教会や住居を破壊し、町を焼き払う。どの道にも聖職者と俗人の、貴族とそうでない人々の、女、子供、幼児の死体が見られる。実にどの道や村にも殺害された死体が横たわり、キリスト教徒が絶滅の際まで破壊されるのを目撃したすべての人には、非嘆と苦痛で満ち溢れている。^⑪」

八八五年には七〇〇隻の船団と四万人の兵士を擁してパリを包囲し、襲撃した。しかし今やかれらの一方的な勝利によって必ずしも終始するものではなかった。八九一年ルーヴェン (Louvain) における戦闘について、『フルダ年代記 (Annals of Fulda)』は次のように記述している。

「キリスト教徒は天にも届く戦いの雄哮をあげた。異教徒も、かれらの慣習に従い、これに劣らぬ叫声をあげた。恐ろしい軍旗が陣営を飛びまわった。剣が抜かれて双方の戦営に下された。……どんな要害でも、捕えられ、敗北しなかったと聞えたノルマン人、その中で最も強い民族デーン人がそこにいた。短い、執拗な攻撃の後、神の恩寵により、勝利はキリスト教徒に帰した。ノルマン人が逃げ場所を求めた時、かれらにそれまで背後の壁として役立った川が、いまやかれらを破壊させることになった。いまやキリスト教徒が他方からかれらを必殺の構えで攻撃して来たので、かれらは川に飛び込まざるを得なくなった。かれらは互いに重なりあって手、首、足につかまりあいながら、何百人、何千人となって川に沈んだ。その死体は川床をさえぎったので川は干上がって見えた。^⑫」

ヴァイキングにとって襲撃、略奪は必ずしも意のままではなくなりつつあった。そのような状況にあって、九一一年ロロ (Rollo) はシャルトルを攻撃したものの、大敗を喫した。他方シャルル三世 (Charles le Simple III) は戦闘を避けるためにエプテ (Epte) 河畔のサン・クレール (St. Clair) においてロロとの協約を結んだ。ロロはネウストリア (現在のノルマンディー

地方)を獲得した。彼は、すでに結婚していたポパに次いでシャルル三世の庶子ギセラと結婚し、翌年キリスト教に改宗した。これを契機として、以後西ヨーロッパに対するヴァイキングの攻撃は終息した。

▲東欧・ロシア▼

スウェーデン人(ヴァイキング)がバルト海の東方の沿岸地域に侵入ないし入植した年代はあきらかになっていない。しかし最も初期の埋葬を西暦六五〇年頃に遡ることができ、しかもスウェーデン出身の人々の墓地を発掘することができた、クルランド(Kurland)(今日のラトヴィア)のグロビン(Grobin)、あるいはアプリア(Apulia)(今日のアプオール(Apuole))は、とりわけ前者は、九世紀頃スウェーデン・ヴァイキングがスウェーデンのヘルイエー(Helgö)やゴットランド(Gotland)と関わり、栄えた交易町であったと考えられる^⑭。これよりさらに内陸に入った地域におけるかれらの足跡をうかがえるものとして、司教プルデンティウス(Prudentius)が『ベルティニア年代誌(Annales Bertiniani)』の中で記述している情報がある。つまり八三九年フランク帝国皇帝ルイー一世(Louis I)の宮廷に、ビザンツ皇帝テオフィラス(Theophilus)の派遣したギリシャ使節団が到着した。注目すべきは、この使節団の中に王の称号を“chacanus”とする「可汗(khaghan)」で、「自分たちの種族は、*羅斯(Rhos)*”と呼ばれている、”と言っている(*qui se, id est gentem suam, Rhos vocari dicebant*)”^⑮。人々が参加していたのである。「*羅斯*」と自称した人々が当時いかなる生活様式を営んでいたかはともあれ、かれらの民族的故地は「スウェーデン(Sueones)」であるとされている。

ロシアにおけるスウェーデン人の足跡を示す考古学的根拠としては、アルディグェボルグ(Aldeigjuborg)(今日のストラヤ・ラドガ(Staraja Ladoga))がある。ここで発掘された土壘や建築物及び遺物^⑯は、スウェーデン人が九世紀初めから一一世紀初めまで占拠していたことを示している。またここで出土したスカルド詩を詠んだルーン文字の刻まれた木片^⑰は九世紀頃のものである。

さて、前記「ロス(ルス)」に関して一一一三年修道僧ネストル(Nestor)が編集した、いわゆる『ネストル年代記(Nestorian Chronicle)』(『ロシア原初年代記』)によれば次の記述をみることができる。

「(人々は)ヴァリヤギを海の向こうに追い払い、彼らに貢物を納めず、自分たちで自分たちの統治を始めた。彼らの間には正義がなく、氏族は氏族に向かって立ち、彼らの間に内紛が起って、互いに戦いを始めた。彼らは互いに『私たちを統治し、法によって裁くような公を、自分たちのために探し求めよう』と言い合った。彼らは海の向こう、ヴァリヤギのルシのもとに行った。このようにそのヴァリヤギは自らをルシと呼んでいたからである。ある者がスヴェイト、ある者がウルマネ、アグニャネと呼ばれ、ある者がゴートと(呼ばれている)ように、これらも(ルシと呼ばれていたのである)。チャヂ、スロヴェネとクリヴィチがルシに『私たちの国の全体は大きく豊かですが、その中には秩序がありません。公となって私たちを統治するために来て下さい』と言った。

そこで三人の兄弟が自分たちの氏族と共に選り出され、ルシのすべてをつれて到着した。長兄リュリク(Rurik)は「ノヴゴロドに」、次のシネウス(Sineus)はベロオゼロに、三番目のトルヴォル(Truvor)はイズボルスクにそれぞれ「座した」。これらの者から、ルシの国が呼び名を得たのである。」^⑧

当該年代記の真偽についての議論は措けば、ベロヤ湖(Lake Beloya)南岸のベロセルスク(Bjelosersk)(ベローゼロ・Beloozero)、エストニア南部のイズボルスク(Izboorsk)、それぞれに定住したとされる次男シネウス、三男トルヴォルが死亡すると、リュリクは単独の支配者となり、ホルムガルド(Holmgård)〔今日のノヴゴロド(Novgorod)〕の町を建設し、そこを首都とした。新しい支配者たちは、当時この一帯の住民たるフィン人たちによっては「Routsi」、古北欧語では「Rodi」とされ、「ルス」と呼ばれていた。但しその語源については「漕ぐ人」、「ロスラーゲン(Roslagen)」、「ロシ河(Ros)」流域民、さらに聖書の中の「ロス皇子(Prince of Ros)」に関連させるなど、^⑨定説が定まらない。その国は次第に拡大していった。自身が最初に治めたアルディギューポリをはじめ、ベローゼロ、ホルムガルド、スモレンスク(Smolensk)などにはかれらの居住した

ことが考古学的遺物によって証明されている。とりわけスモレンスクの近郊には、焼かれた船の痕跡を伴出する三八〇〇基あまりの墳墓を擁するグネツドヴォ (Gnezdovo) の広大な共同埋葬地が広がっている。²⁰かれらはスモレンスクからドニエプル川をさらに下り、新たな、そして強力な本拠地「ケーヌガルド (Kaunugarðr)」つまりキエフ (Kiev) を建設した。なお、キエフ北東デスナ川 (Dessna) 添いのチェルニゴフ (Chernigov) およびその周辺には多数の墳丘があり、その最大規模の「チェルナヤ・モギラ (Chernaia Mogila) (「黒い墳墓」の意) は、その規模を一〇×四〇メートルとし、その中心部には未火葬の木の家があり、豪華な副葬品が添えられた三人の遺体が安置されていた。部分的にはスラヴ化してはいるものの基本的にはスウェーデン系統²¹のものであった。さて、かれらはさらにドニエプル川の河口デルタにはベルザニ (Berezany) を建設し、アゾフ海からドン川を遡った方向にあった町サルケル (Sarkel) を強奪した (九六五年)。このような趨勢の中でかれらはビザンツとの接触がますます増加し、これにともなってその利害の衝突するところとなったのはいうまでもない。たとえば前記『ロシア原初年代記』九〇七年の条には次のように記されている。

「オレグはイゴリをキエフに残してグレキを攻撃した。彼は多数のヴァリャギ、スロヴェネ、チュヂとクリヴィチ、メリヤ、ポリャネ、セヴェル、ドレヴリャネ、ラヂミチ、ホルヴァチ、ドウレビ、通訳であるチヴェルツイを連れて行った。これらすべては大スキタイと呼ばれていたのである。オレグはこれらすべてを連れて馬と船によって出発した。船はその数二千隻であった。そして彼はツァリグラドに到着した。グレキはスドを閉鎖し、町 (の門) を閉ざした。オレグは岸に上陸し、「軍勢に船を引き上げるように命じて」町の周りで戦い、多くのグレキを殺戮し、多くの宮殿を破壊し、教会を燃やした。また彼らが捕らえた捕虜のうち、ある者は斬り殺し、他の者は苦しめ、別の者は射殺し、また別の者は海に投げ込んだ。その他軍隊がしばしば行う多くの「悪事を」ルシもグレキに行ったのである。またオレグは車輪を作り船を車輪の上に載せるように自分の軍勢に命じた。順風だったので (人々は) 野原から帆を張って町へ進んで行った。グレキは (これを) 見て恐れ、オレグのもとに使者を送って、『町を破壊しないで下さい、あなたが欲しいだけの貢物を支払います』

と言った。そこでオレグは軍を止めた。(グレキは)彼に対して食物と酒を運び出したが、彼はそれを受け取らなかった。毒が仕込んであったからである。グレキは恐れて『これはオレグではなくて聖ドミトリーが神から私たちに遣わされたのだ』と言った。²²⁾

このように激しいビザンツとの戦闘があったとはいえ、かれらは九一一年、九四四年に通商条約を結び、友好的な善隣関係の達成が計られた。²³⁾ なお、かれらがそのような大河を利用し、はるか遠大な距離をいかにしてビザンツにまで達したのか、また途中の諸民族との関係などその様子はその頃(九五〇年)のビザンツ皇帝コンスタンティヌス七世・ポルフィロゲニトス(Constantine VII Porphyrogenitus)の記述『帝国行政論(De Administrando Imperio)』によつて知ることができる。²⁴⁾ しかも周辺諸民族とビザンツとの政治的確執を反映し、それがいかに危険に満ちたものであったかは、『帝国行政論』のみならず、たとえば次に『ロシア原初年代記』九七一年、九七二年の条にみる、ルーリツクの曾孫スヴァトスラフ(Svyatoslav)の劇的運命に窺い知ることができよう。

「スヴァトスラフはグレキと和を結び、船に乗って浅瀬へ出発した。父の軍司令官スヴェネリドが彼に『公よ、馬に乗って迂回しなさい。ペチェネギが浅瀬に陣を布いていますから』と言った。(スヴァトスラフは)彼の言うことを聞かず、船で出かけた。……ペチェネギがこれを聞いて浅瀬を占拠したので、スヴァトスラフは浅瀬に着いたが浅瀬を通り抜けることができなかった。そこで彼は越冬するためにベロベレジエにとどまった。彼らにはもはや食糧がなく、馬の頭が半グリヴナするほどの激しい飢えが起つたが、スヴァトスラフはそこで越冬した。

春が来たとき、スヴァトスラフが浅瀬に進と、ペチェネギの公クリヤが彼に襲いかかり、スヴァトスラフを殺した。彼らは彼の首を取り、彼の頭蓋骨に〔金を〕張り、杯を作ってそれで飲んだのである。スヴェネリドはキエフのヤロポルクのもとに戻った。スヴァトスラフの治世は全部で二十と八年であった。²⁵⁾」

また、かれらによる興味ある商業活動の様子は、たとえばイブン・フルダスヒフ(Ibn Khurdadbeh)、イブン・ルスタ(Ibn

Rustah)、イブン・ファドラン (Ibn Fadlan) などによる記述によって大略を知ることができる²⁶⁾。かれらは、ラドガ湖から黒海へ向って、河川を遡り、あるいはドニエプル川水系を利用し、その西方にあってはバルト海へ注ぐ河川を、その東方にあっては長大なヴォルガ川を利用するものであった。主に九世紀頃、東洋と西洋、両世界の「最も重要な結節点 (wichtigste Knotenpunkt)」として「ヴァイキング期の東西貿易に重要な役割 (a significant role in Viking Age trade between East and West)」²⁷⁾を担い、貿易センターとして、その隆盛を誇ったスウェーデン、メーラル湖のビルカ (Birka) について、その衰退の一つの原因は、九六五年頃スヴィヤトスラフ (Svyatoslav) がヴォルガ湾曲部のブルガリア人 (Bulgars) を襲撃し、そのために東方貿易が途絶したためであるという解釈²⁸⁾は、いかに双方の世界がかれらによって媒介されていたかを物語っている。さて、キエフ公国の版図を拡大するなど、九八〇年から在位したウラジミール一世 (Vladimir I) は、九八八年ビザンツ皇帝の妹アンナと結婚したばかりでなく、ギリシャ正教の採用を決定した。これは、スラヴ的要素と並んで、これまで継承されてきた粗野で波瀾に満ちた (スウェーデン) ヴァイキングの精神や伝統がやがて消失してゆくことを決定的に方向づける出来事であったということができよう²⁹⁾。スウェーデン中部に多数残る「イングヴァル石碑 (Ingvar Stenene)」のうち、「グリプスホルム (Gripsholm) 石碑」は一〇四一年大旅行家イングヴァル (Yngvarr Víðforli) が遙か東方のイスラム教国「絹の国 (セル克蘭ド (Serkland))」(さしあたり現在のウズベキスタン地方か) へ遠征したことを記し、「息子のハラルド (Haraldr)、イングヴァールの兄 (弟) の記念のためにトーラ (Tola) がこの石碑を建てた。かれらは雄しく出立した。はるか遠く金を求めて。そして東方のあるところで。敵の驚の糧となり。また南で死んだ。絹の国で」³⁰⁾と刻んでいる。これはスウェーデン・ヴァイキングによる活躍の最後を飾る文字どおりの記念碑であったといえよう。

ヴァイキングによる活動は、上記にみたアイルランド、イングランド、西ヨーロッパ、ロシアなどの地域以外に、イベリヤ

半島、イタリア半島などにも及んでいる。しかし本稿ではこの地域に関しては割愛する。以下、かれらによる北方方面における活動について、その概観を記す。

△フェロー諸島▽

スコットランドとアイスランドのほぼ中間、ノルウェーからおよそ六七〇キロメートルの北大西洋上に位置する島々、これがフェロー諸島である。当該諸島にどんなヨーロッパ人が、いつ頃最初に上陸したかについて明確なことはわかっていない。しかし次の史料はこの点についてわずかながらもその情報を提供してくれる。つまりアイルランドの修道僧ディクイル(Diicuil)は、その八二五年の著書『地球の尺度について(De mensura orbis terrae)』の中で次のように述べている。

「ブリテン北方の海洋には多くの他の島々があって、それらの島々にはブリテン諸島の一番北から順風に恵まれれば二昼夜の直行航海で行くことができる。夏の二昼夜で二人乗りの小さなボートに乗ってこれらの島の一つに自分は来た、とある聖職者は私に告げた。これらの島のいくつかは非常に小さな島である。殆ど全ての島々は狭い海峡によって分けられている。我がアイルランドから航海してきた隠者たちがおよそ一〇〇年の間これらの島々に住んでいた。世の始まり以来そこに人が定住したことはなかったのだが、その時と同じように、そして今はノースマンの海賊行為の故に一人の隠者もいなくなり、これらの島々はおびただ夥しい数の羊と驚くほどの多種類の海鳥で満ちている。これらの島々のことを書いた学者の本①というものを自分は見たことがない。」

上記の史料によれば、およそ七〇〇年代に入って間もなくの頃、アイルランド人の修道僧らが上陸し、その後およそ一〇〇年間、「ノースマンの海賊行為(Latrones Normannorum)」つまりヴァイキングが侵略してくるまではそこに居住していたと考えられる。

さて、最初に上陸したと考えられる修道僧らが島を去った後、代って同諸島に最初に入ってきた「ノースマン」が具体的に

誰れであったのかはわかっていない。しかし、一二〇〇年頃アイスランドで記述された『フェローインガ・サガ (Faereyinga Saga)』には次の一節がある。

「グリーム・カンバンという男がいた。彼はハーラル美髪王の時代に、誰よりも先にフェロー諸島に定住した。当時、多くの人々が王(ハーラル美髪王)の権力欲を嫌ってかの地(ノルウェー)を離れた。フェロー諸島に定住し、そこで土地を耕す者もいたが、多くの者は人の住まぬ他の土地を求めて去っていった。」³²⁾

ハーラル美髪王は、地方豪族を抑えて国内を統一し(八七二年)、王国を建てたものの、その統治に抗して海外へ移住した豪族も少なくなかったと考えられる。³³⁾ 上記に言及されているグリーム・カンバン (Grimr Kanban) なる人物もそのうちの一人であったであろう。

△アイスランド▽

さて、このような、とりわけノルウェーから脱出した人々(ヴァイキング)はフェロー諸島以外にも、シェトランド、オークニー、ヘブリディーズなどの諸島やスコットランドなどにも渡航した。そのような状況の中で、かれらがアイスランドを発見し、さらにそこに向って移住し、あるいは往来したことは自然の成り行きであったと考えられる。但し、ここで筆者が留意すべきと考える点は、かれらは概して上記の島々に渡航し、在住し、しかる後にアイスランドに移住していったという歴史的経過である。³⁴⁾

ところで八、九世紀の頃はこのような状況に至っていたと考えられるとはいえ、さらに歴史を遡れば、すでに紀元前四世紀末(紀元前三三〇―三〇〇年)、ギリシャのピュテアス(Pythias)は、その著書『大海洋について (Περί τῶν Ὀκεανῶν)』によれば、古代ギリシャ、ローマではアイスランドに比定された『Ultima Thule (最果の国テューレ)』に赴いたとされる旅について、次のように記述している。

「彼（ピュテアス―筆者）はテューレとその周辺の地域について調査を行ったが、そこではもはや陸地、海、あるいは空気の区別もなく、これら三つのものが海肺のような混合体となっており、（また）ここでは陸地も海もすべての物が浮いており、またこれ（混合体）はすべてを結合させ、徒歩でも舟でも渡ることはできない、と彼は言っている。肺に似た物体は彼自身目撃したと彼は言っている。彼の語っている他の事項は彼の伝聞によるものである。」³⁵

その後の古代ギリシャ・ローマの著名な人々、たとえばポリビウス（Polybius）、ストラボ（Strabo）、プリーニー（Gaius Plinius Secundus）、タキトウス（Publius Cornelius Tacitus）などは、ブリテン島から海路で六日程度の旅程に位置するこの「テューレ」と呼ばれた島の存在は承知していたと思われる。³⁶ 紀元六世紀前半のビザンツの歴史家プロコピウス（Procopius）：五世紀末（五六五年）はその「テューレ」について、

「彼らは神々に絶えず犠牲を献ずる。死者にも同じことをする。最良の犠牲は戦いの中で一番に捕らえられた人間であると考え、この捕虜は最高の神とされる戦いの神に献ぜられる。」³⁷

と描写している。プロコピウスはまた同島の冬至や夏至について記述している。冬至や夏至についてはベータ（Bede）：およそ六七三―七三五年）のみならず、既述のディクイルもまた同著書において類似した情景を描き、次のように記述している。

「今ではもう三〇年ほど昔になるが、この島に二月一日から八月一日まで住んだ聖職者たちはこう語ったことがある。すなわち、夏至の日ばかりでなく、その前後の何日間か、落日はまるで小さな丘に隠れるかのように訪れたのだが、それですべてが闇に包まれたわけではなかった。夕暮れのごく短い時間、空はまた夕焼けに染まり、やりとげたいと思うどんな仕事でも――たとえば、下着のシラミを取り除くといったことさえ――、さながら真昼の光の下で行なうかのように正確にできた。そして、高い山の上に登りさえすれば、太陽はけっして姿を隠そうとはしなかったものだ。」³⁸

一〇七六年頃アダム・ブレメンシス（Adam Bremensis）：「ブレーメンのアダム」は、八世紀頃のこととして、北海の船旅の様子を記している。

「フリースラントの一部の貴族たちは、大海を彷徨^{さまよ}う目的で北に向けて勇躍船出して行ったという。住民たちが、ウェザー川の河口から直接北に針路を取った場合、まったく陸地に出会わないと言い張っていたからである。船乗りたちは、聖樹である柏の木の下でこのついぞ耳にしたことのないような要請を調査する旨誓ったあと、漕ぎ手たちを気軽に集めてフリースラント沖から出立した。こうして彼らは、右手にデンマーク、左手にブリテン島を見ながらオークニー諸島に到着した。それから、この地を出立して島々の影を左手後方に見送り、さらにノルウェーの姿を右手に確かめながら長い航海をしたあと、ついに氷に囲まれたアイスランドに上陸する。」³⁹

このように古代以来、不確かなながらもその存在が予想されていたこの「テューレ」、つまりアイスランドには、パパと呼ばれたキリスト教徒が住んでいたが、かれらの去ったあと、およそ八六〇年代に同島を具体的に発見し、移住を試みた最初のノルマン人^①ヴァイキングについて、さしあたり三人の名前が挙げられる。つまり、ナドット・ザ・ヴァイキング (Naddod the Viking)、ガルダール・スヴァヴァルスソン (Gardar Svavarsson)、フロキ・ヴィルゲルダルソン (Flóki Vilgerdarsón) である。およそ一二世紀頃に書き留められたと考えられる『植民の書 (Landnámabók)』によれば、その発見、探検の経過は次のようである。

「ノルウェーからフェロー諸島へ航海をしている人々があったと記録されており、それはナドット・ザ・ヴァイキングであったと言われている。かれらは嵐で西方の大海原へと流され、そこで大きな国土を発見した。かれらはイーストファースの地域で、すばらしい眺望を見渡すことのできる高い山に登った。かれらは煙かあるいは他のなにか、人の住んでいる気配を探したものの、なにもみられなかった。かれらは秋まで(そこに)留まり、そしてフェロー諸島へ帰るべくそこを離れようとした時、かれらは山の頂きに雪を目撃した。そこでこうしてその土地をスノーランドと呼び、それを大いに褒めた。⁴⁰」

「血統はスウェーデン人である、ガルダール・スヴァヴァルスソンという名前の一人の男がいた。彼は女占い師である母の命令でスノーランドを探すために出発した。彼はイースターン・ホーンの東に上陸したところ、そこには舟着き場が

あった。ガルダールはその土地を回航し、それが島であることがわかった。その冬彼は家を建てて、スキヤルファンディのフサヴィクで越冬した。……春になるとガルダールはノルウェーに帰り、その土地を大いに褒めた。その土地は今もガルダールスホルム（「ガルダールの島」）と呼ばれ、そこには山と海岸の間に森があった。^④」

「フロキ・ヴィルゲルダルソンという名前の、一人の偉大なヴァイキングがいた。彼はホルダランドとロガランドの交わる、今日ではフロカヴァルディと呼ばれる所から、ガルダルスホルムを探すために出航した。最初かれらはシェトランドへ向けて航行し、そこで錨を下ろした。……かれらはホーン（の見える所）までやって来て、南岸に沿って航行した。レキヤネス（放煙岬）を越えて西方に航行したとき、狭湾がかれらの目前に開けており、かれらはスネフェルスネスを見ることができた。ファクシーが言った、『我々が発見した土地は大きな土地かもしれない。大きな川があるぞ。』フロキとその仲間達は西方へと航海を続け、ブレイダフィヨルドを越え、そしてヴァルダストランド近くの（通称）ヴァトンスフィヨルドに上陸した。かれらはそこでのすばらしい漁撈にあまりにも便乗しすぎたので、干し草を作るのを怠ってしまい、そのためにかれらのすべての家畜が冬期中に死んでしまった。かなり寒い春があとに続いた。フロキは高い山に登り、北方を仰いだところ、狭湾は氷で埋まっているのを目撃した。それでその土地をアイスランドと呼んだ。……フロキはボルガルフイヨルドで越冬し……翌年の夏にノルウェーに向けて航行した。かれは、その場所について尋ねられたとき、不評を与えたのであった。^⑤」

さて、当該アイスランドへ最初に入植した人物は、『アイスランド人の書 (Íslendingabók)』によれば、インゴルフ・アルナルソン (Ingolf Arnarson)、『植民の書』によれば、インゴルフとレイフ・フロッドマルスソン (Leif Hrodmarsson) (別称ヒョルレイフ・フロッドマルスソン Hiorleif Hrodmarsson) とされている。時期はハラルド美髪王がノルウェーの王座について一二年目の夏、八七〇（八七四）年頃であった。入植時の様子について、前者は次のように記している。

「ノルウェーからアイスランドへ最初の移住があったのは、黒のハルヴダンの息子、美髪のハラルドが世を治めていた頃で

あつた。…テイト…ソルケル…ソーリーズらの推測によると…イーヴァルがイングランド王の聖エアドムンドを殺した頃であつた。これは史書に記されているとおり紀元八七〇年のことであつた。

美・髪・の・ハラルドが一六歳のとき、ノルウェーからはじめてアイスランドに到着したノルウェー人はインゴルヴという名であつた。また二度目は数年後であつた。彼は南の方^{かた}レイキャヴィークに居を定めた。彼が最初に上陸したミンサク浜の東をインゴルヴ岬と呼び、またオルフォッサー(川)の西側の、後に自分の所有としたところをインゴルヴ山と呼ぶ。^④

後者によると、

「義兄弟(インゴルフとレイフ)は、レイブン・フロキが発見し、アイスランドと称した土地を探すために、完全に艤装した船で出かけた。かれらはその土地を発見し、アルプタフィヨルドの南部東沿岸に上陸した。その土地は北部よりもずっと実り豊かだとかれらには思われた。そこでの一冬(の越冬)の後、かれらはノルウェーに戻つた。インゴルフはそれから移住のための航海の準備をし、他方レイフはブリテン諸島へヴァイキングに出かけた。……」

インゴルフとヒョルレイフ(レイフ)がアイスランドへ移住のために出発した夏は、ハラルド美髪王がノルウェーの王座について一二年目、この世の初まりから三七七四冬であり、主の顕現から八七四年であつた。アイスランドが見えてくるとかれらは分れた。インゴルフは、自分の高座柱を海中に投じ、それらが漂着した所に居をかまえると誓つた。彼は今ではインゴルフスホフディと呼ばれる土地に到着した。ヒョルレイフは沿岸にそつてさらに西方へ航行し…、ヒョルレイフホフディの地に到着し、…彼はそこでその冬を過した。…」

翌年の夏インゴルフは沿岸にそつて西方に旅行し、オルファス川の西、インゴルフスフェルで三度目の冬を過した。その期間中にヴィフィルとカルリはアルナヴァルの近くで高座柱を発見した。春にはインゴルフは荒野を横切り、高座柱が漂着したところに自分の家を建てた。彼はそこをレイキャヴィークと名づけた。その柱は今日までそこに残っている。^④

インゴルフが移住してからおよそ六〇年後、西暦九三〇年ころには島の可住地は大方占拠され、植民は完了した。移住した

人々はおよそ一五、〇〇〇人〜二〇、〇〇〇人ほどであったと推定される。アイスランドにアルシングという全島議会が設けられたのもこの頃であった。これは行政的機能は欠くものの、司法、立法の機能を備え、「かれらには王は存在せず、ただ法のみ存在する (Apud illos non est rex, nisi tantum lex)。(Adam Bremensis. 一〇七六年頃)^④」という共和政国家の成立であった。しかも『アイスランド人の書』によれば、当該集会において西暦一〇〇〇年にはキリスト教が正式に導入されたといわれる。また一〇一六年にはオラーフ二世は異教崇拜を禁止し、教会の建設に着手した。爾来アイスランドは西欧世界との結びつきを一段と強め、かくしてここに本来のヴァイキング時代は徐々にその終焉を迎えることとなった。これを象徴するかのように、一二六二年アイスランドはノルウェーの支配下に下り、その独立を失った。しかしそれ以降の歴史は本稿の課題ではない。

《グリーンランド》

九六〇(九七〇)年頃、ノルウェーの南西スタヴァンゲル (Stavanger) 近くのヤーレン (Jaeren) に居住していたソルヴァルド (Porvald Asvaldsson) は人を殺害した罪科によって同地を去らなければならなかった。彼は息子の「赤毛のエリク (Eirík Raudi) を伴って、まずはアイスランドの北西に位置するホーンストランディ (Hornstrandir) に移住した。エリクが一〇(一六)歳の頃であった。

さて九八二年エリクは父親と同様に殺人の廉で、トルスネス・テイニング (集会) (Porsnes Thing) において三年間の追放刑を宣告された。アイスランドは言うまでもなく、ノルウェーにおいても受け入れを拒否された彼は、その三年間を、五〇(六〇)年ほど前にグンビョルン (Gunbjoun Ulfsson) が偶然に目撃したという新天地の発見に費やすこととした。

「——彼は、ウルフ・クラークの息子グンビョルンが、アイスランド西方の海上を漂流した時に見つけ、それ以来グンビョルン領 (岩礁) と呼ばれていた国を探したいと言った。彼は、その国を発見したら友人の許に帰って来ると約束した。」

『植民の書』⁴⁴

彼は順調に航海し、グンビヨルン岩礁を確認した。彼はさらにその陸地、とりわけヘルヨルフスネス (Herjolfsnes) (イキゲイト・Ikiगत) とエリクスフィヨルド (Eiriksfjord) (現テュナイドリアーフィク・Tungdialartik) の間の探検と調査を試み、自身でも居住した。

さて、九八五年アイスランドに戻った彼はその島をグリーンランドと命名し、他の人々に移住をすすめた。『アイスランド人の書』では上記の事情について次のように語っている。

「グリーンランドと呼ばれる土地はアイスランド人によって発見され、植民されたのである。ブレイザフィヨルドに赤毛のエイリークという男がいて、彼がここアイスランドから渡り、それ以来エイリークスフィヨルドと呼ばれている土地を占取した。彼はこの土地に名をつけてグリーンランドと呼び、そこに良い名が付けられたら人々は喜んで行くだろう、と彼は語った。」⁴⁵

九八六年エリクは二五隻の船団を仕立てグリーンランドに向かった。しかし無事に目的地に辿り着いたのは一四隻ほどであった。エリクは、エリクスフィヨルド (Eiriksfjord) のブラッターリーズ (Brattahlíð) (現 Qagssiarssuk) に自分の農場を設けた。そこは、それ以降の植民地の中心となり、「東部入植地 (Eystribyggð)」と呼ばれた。また一〇〇〇年頃エリクの息子レイフ・エリクソン (Leif Eiríksson) がキリスト教を導入した。その事情は『赤毛のエリクのサガ (Eiríks Saga Rauða)』に語られている。

「レイブと彼の仲間らはヘブリデスを出て、秋にはノルウェーに来た。彼はオーラブ・トリグベンソン (Olaf Trygvason) 王の宮廷に参上して、非常に名誉な待遇をうけた。王が彼をすぐれた人物と考えたからである。

ある時、王はレイブと話して言った。『お前は夏の夏にはグリーンランドに帰るつもりか。』
『陛下のお許しがあれば参るつもりです。』とレイブは答えた。

『うむ、それがよからう。ひとつ、キリスト教をグリーンランドに弘めるために、わしの委託を受けて行ってもらおう。』
こう王が言うと、レイブは答えた——仰せのままに致しますが、私の考えでは、この使命をグリーンランドで果すのは困難かと思えます、と。しかし王は、お前より以上にこの任務を果すに適した者はいないと言って、『お前には好運がついて廻っているからな。』とおっしゃった。

レイブは答えた。『私が好運だとすれば、それは陛下の加護をえている時だけです。』と。

やがて用意が整うと、レイブは海に出た。彼は長いこと苦しい航海をしたはてに、とうとうこれまでは知られなかった一つの土地に來た。そこには野生の麦の生えた野があり、葡萄が生えてい、カエデの木もあった。彼らはそれらのすべてを少しづつ見本に取ったが、若干の木は建築に使えるほど大きかった。またレイブは一艘の難破船を見つけて、その人々を家につれて帰り、冬のあいだ親切にもてなしてやった。彼はこの国にキリスト教を伝えて高貴な心と善意を示したのと、これらの人々を救ったこととで「幸運児レイブ」と呼ばれることになった。

彼はエリク・フィヨルドに上陸して、そこからブラッターリッドの屋敷に向かい、栄誉をもって迎えられた。彼はさっそくキリストとカトリックの教えを弘め、オーラブ・トリグベソン王のメッセイジを伝えて、いかにこの教えがすばらしく喜びを齎らすものであるかを説いた。⁴⁶⁾

事実、この地域には多くの農場および、その周辺には一五〇体あまりの遺骨が埋葬されていた教会などの遺跡が発見されている。やがてその北方には「西部入植地 (Vestribygð)」も開拓された。アイスランドからの移住はその後も継続し、植民活動も発展していった。

最終的にはおよそ五、〇〇〇〜六、五〇〇人⁴⁷⁾あまりを数えたグリーンランドへの入植の歴史とその繁栄は、しかしながら束の間の出来事であったのであろうか。『王の鑑 (Konungs Skuggsjá)』は次のように述べている。

「人々はしばしば、どの土地が氷がなくて居住可能であるかを見渡せて、わかるように、内陸部の方へ上ってゆき、また多

くの場合で一番高い山に登ってみた。しかし海沿いで小さな細地であるような場所は、既に占有されているところを除いては、どこにも見つけることはできなかった。⁴⁸⁾」

つまり、グリーンランドでは開拓すべき土地にはおのずとその限界が身近かにせまっていたのである。このような地理的状况に加えて、一二六二年以後グリーンランドはノルウェーの支配を受け、経済的にも多大な打撃を蒙った。グリーンランドの衰退は明白であった。

このような世情を追認するかのように、アイスランドのスカルホルト (Skalholt) の司教であるギスリ (Gísli Oddsson) は、その年代記の二三四二年の条で次のように述べている。

「グリーンランドの住民たちは、既にあらゆる善行や真の徳を見捨てていたので、かれら自身の自由意思で、真の信仰やキリスト教を放棄し、そして自身はアメリカの人々に加わった (ad Americē populos se converterunt)。(当時)人々は、グリーンランドは地球では西部の地域に密接していると考えていた。この時以来キリスト教徒たちはグリーンランドへの航行を放棄するということになった。⁴⁹⁾」

ここで議論となるのは、*ad Americē populos se converterunt* の箇所である。議論の詳細は措くものの、⁵⁰⁾ 従来の見解では「アメリカの人々」とはスクレーリング (Skraelingar) のことであり、グリーンランド人は異教信仰に陥っていったと解されている。しかしヘルイェ・イングスタッド (H. Ingstad) の意見によれば、グリーンランド人はその土地を放棄せざるを得ず、北米大陸へ移住していったと解している。⁵¹⁾ 一三四八年には東部入植地は存在していたものの、西部入植地はすでに滅亡していた。これについてガルダルの司教イヴァル・バルザルソン (Ívar Bárðarson) は、一三四九年を遡る数年前のこととして、『グリーンランドの描写 (Description of Greenland)』の中で次のように報告している。

「西部入植地にはステンスネス教会 (Stensnes Church) という名前の大きな教会がある。その教会は一時期大聖堂で司教座聖堂であった。今やスクレーリング (Skraelings) が西部入植地のすべてを破壊してしまったので、そこには馬、山羊、

牛、それに羊しか残されておらず、それらは皆野生化しており、他にキリスト教徒であれ異教徒であれ人間は一人もいない。^{⑤③}

一三七六年から一三七八年の間の、いずれかの年にガルダール (Gardar) (在住) の司教アルフ (Alf) が死亡した。しかし、その後しばらくは司教職が指名されず、しかもアルフを継いだヘンリック (Henrik) は一度もガルダールの地を踏まなかったのは、このような世情不安とは無関係であるとはいえないであろう。一四〇六年ノルウェーからアイスランドに向った船はグリーンランドへ流され、「四」^{⑤④}年間、「東部」^{⑤⑤}入植地にとどまることを余儀なくされたものの、その時には野性化した家畜以外人影はみられなかった。一四四八年教皇ニコラス五世 (Pope Nicholas V) は、その三〇数年前のこととして、野蛮で異教の人々が船を仕立て、残酷な攻撃を行い、土地を荒廃させ、教会を破壊し、そして奴隷的労働に使役すべく、男女の人々を捕虜としてつれ去った旨を、トロニエムの大司教 (Archbishop of Trondheim) に書き送っている。^{⑤⑥} さらにその東部入植地のガルダール教区の状況について、一四九二年教皇アレキサンダー六世 (Alexander VI) は、その厳しい食糧不足、八〇年間に及ぶ断絶した船舶の航行、かくして信仰の放棄されるに至った事情をニダロスの大司教 (Archbishop of Nidaros) へ綴り送っている。^{⑤⑦}

一六二三年頃、ビョルン (Björn Jónsson) によって編纂された『グリーンランド (古) 年代記 (Grænlandsannáll) (Grænlandia Vetus Chorographia)』は、それまでかろうじて生活が続いていたと思われる東部入植地、たとえばヘルヨルフスネ (Herjólfssnes) (イキゲ・Ikigait) において次のことが目撃されたとして、記述している。すなわち、一五四〇年頃、ジョン・グリーンランダー (Jon Grœnlendingr) と呼ばれるアイスランド人は、ある狭湾で、いくつかの小屋と共に、埋葬されることなく、ホームズパンとアザラシの毛皮から成る衣服、よくできた布製の帽子にくるまった一体の (ノルマン) 人の屍体を発見し、その傍にあった一本の使い古した、曲った短刀を土産として持ち帰った、と。^{⑤⑧} これがノルマン人の最後であったのか、翌年にはノルマン人の住居跡は一切認められなかったのである。グリーンランドにおける入植活動の衰退の原因については議論^{⑤⑨}はある

ものの、本稿では割愛する。

第三章 ヲインランドの発見とその根拠

上記にみたように、九世紀から一一世紀頃の北大西洋海域、つまりノルウェー、アイスランド、グリーンランドにおける往来は、交易に携わる商人、船乗りたちにとっては周知のルートとなっていたと思われる。しかもデービス海峡を挟んだグリーンランドとバフィン諸島間の距離およそ二三〇海里は、むしろグリーンランドとアイスランド間のそれよりも短く、両島に聳える七〇〇〇フィート級の峰は、好条件の下では相互に目視できる^①。したがってグリーンランド人が意図的であれ、遭難が契機であれ、バフィン諸島に辿りつき、さらにカナダのラブラドルの沿岸を南下したことは充分考えられることである。そのような状況の中で「ヴィンランド (Vinland)」の発見、そして上陸という出来事が生じたのである。時期はおよそ九八〇年代の末から一〇〇〇年頃と考えられている。その発見の経緯については二編のサガが語っている。その関係箇所を紹介する。まず『グリーンランド人のサガ (Greenlandinga Páttur)』では次のように記述されている。

「ブラッターリーズ (Brattahlíð) 出身の赤毛のエリクの息子レイフ (Leif Eriksson) は、ヘルヨールヴの息子ビヤルニ (Bjarni Herjólfsson) から船を買い、総勢三五名の乗組員を雇った。目的は、ビヤルニがかってグリーンランドへ向う途中、進路を誤り、以前に見たことのない陸地を海上から目撃した、その土地の探検であった。」

「さて、かれらは船の準備をととのえ、用意ができると沖へ出た。そしてビヤルニたちが最後にみとめた国を最初にみつけた。かれらはそこで岸に船を向け、錨を投げ、ボートをおろし、岸に上がったが、そこには草が生えていなかった。上方には氷河しかなく、海から氷河までは一枚の平石のようになっていて、かれらはこの国は不毛だと思った。そのときレイヴが言った。

『おれたちはこの国に上陸したのだから、ビャルニとはわけがちがう。さて、おれはこの国に名をつけてヘルランド（平石の国）と呼ぼう』

それからかれらは船にもどった。この後かれらは沖に向かい、第二の国を発見した。岸に船を向け、錨を投げ、ボートをおろし、上陸した。この国は平らで森が茂っていた。行くところ白い砂がひろがっており、海への傾斜はなだらかだった。レイヴはいった。

『この状況からこの国に名をつけてマルクランド（森の国）と呼ぼう』

それからかれらはできるだけ早く乗船した。

さて、かれらは北東の風に送られて沖に向い、二日間海上にいるうちに国をみつけた。岸に向い、陸地から北手にあたる島のところにきて、そこに上陸し、よい天気であったのであたりを見回しているうちに草に露がやどっているのが目に入った。たまたまかれらは手に露をつけて口にもっていった。それはいままでに味わったことがないくらい甘いと思った。その後かれらは船にもどり、島と陸地から北にのびている岬の間の海峡をとおった。岬の前を西の方向に向かった。干潮でそこに浅瀬があった。船は浅瀬に乗り上げた。船から見ると海までは遠かった。しかし陸地まで行きたいという好奇心があまり強かったので潮が船の下に満ちてくるのが待ち切れず、湖から川が流れでているところまで駆けていった。だが、潮が船の下に満ちてくると、かれらはボートにのり、船まで漕いでいき、川をさかのぼり、ついで湖に入った。そこで錨を投げ、船から寝袋をおろしてそこに仮の住居をつくった。その後で冬はそこで暮らすことにしようかと相談し、そこに大きな家をたてた。

その川にも湖にも鮭がいた。これまで見たよりも大きな鮭だった。かれらの考えではそこは地味がとてもよいので、冬も家畜に飼葉の不足することはなさそうだった。そこでは冬も霜がおりず、草もほとんど枯れなかった。そこはグリーンランドやアイスランドよりも昼と夜の長さが同じに近かった。冬のもっとも短い日々には太陽は午前九時の位置と午後三

時半の位置をとった（北緯四九度と五八度二六分の間？）。家作りが終わったときレイヴは仲間の方たちに言った。

『さて、おれたちの仲間をふたつに分けて、この国を探検させたい。全体の半分は家に残る。あとの半分が探検せねばならん。しかし夕方ここに帰って来れないくらい遠くへ行ってはならん。また離れ離れになっちゃいかんぞ。』

こうしてかれらはしばらくの間その通りにした。レイヴはかれらとでかけたり、家に残ったり交互にした。レイヴは身の丈が高くがっちりした男で、堂々たる風采をしており、賢明で、あらゆる点で節度をわきまえた男であった。

ある晩かれらの隊から一人いなくなった。それはドイツ人テュルキルだった。レイヴはこのため大変腹をたてた。というのも、テュルキルはレイヴ父子と長い間ともに暮らし、少年時代のレイヴを大変かわいがってくれたからである。レイヴはそこで仲間の者をなじり、レイヴをいれて一二名でテュルキルをさがしに行く用意をした。だがかれらが家を出るか出ないかのところでテュルキルとばったり出会った。彼はよるこんで迎えられた。レイヴはすぐに養父が上機嫌であることに気づいた。テュルキルは額がひいで、よく動く目をしており、顔はパツとせず、小柄で貧弱だったが、あらゆる類いの手仕事にもすこぶる器用な男だった。レイヴは彼にむかっていった。

『養父さん、なぜこんな遅かったのだ。なぜ仲間からはなれたのだ』

すると彼ははじめ長いことドイツ語で喋り、目をキョロつかせ顔をゆがめた。彼の言っていることが、彼らにはわからなかった。しばらくすると彼はノルウェー語で話した。

『わたしはあんたたちからそれほど遠くはなれたわけじゃない。ニュースがあるんだ。ブドウの木とブドウを見つけたんだよ』

『それは本当か、養父さん』

『確かに本当だ』と彼は言った。『ブドウの木とブドウのあるところで、わたしは生まれたのだからな』

こうしてかれらはその夜は寝た。だが朝になるとレイヴは乗組員たちにむかって言った。

『さあこれから二つの仕事をしなくちゃならん。毎日ブドウをつんだり、ブドウの木をきったり、船の積荷をつくるために林を切りたおさなければならん』

そしてそのとおりになった。こうして話によればかれらのボートはブドウでいっぱいになった。さて船の積荷に木が切りたおされた。そして春がくると準備をして出帆した。レイヴは土地の豊かさからこの国を名づけてヴィンランドと呼んだ。^②

『赤毛のエリクのサガ』の記述は、本稿第二章、グリーンランドにキリスト教が導入される経緯について紹介した箇所です
でに言及されている。

ヴィンランド発見のいきさつ、その探検、およびその後の入植の経過について、二編のサガには少なからず一致しない記述が施されている。そこで現在ヴィンランドをめぐる様々な議論がなされている。たとえば、そもそも二つのサガのうち、その記述内容、その構成などを根拠として、いずれに信憑性があるのか。"vinland" の "vin" という語彙自体をいかに解釈するのか。したがってその植物を何と考えるのか。探検した人々の目撃した獣、魚、鳥などは具体的に何であったのか。それら動物、植物、魚類の分布はどのように考えるべきなのか。しかも当時と現在の、気温の温度差の存在の有無を問題にし、上記の論議をより複雑にしている。またかれらの遭遇した住民「スクレーリング (Skrælings)」の人種は何であったのか。つまりそれはイヌイット (エスキモー) であったのか、ネイティヴ・アメリカン (インディアン) であったのか。これは、それぞれの居住せる分布状況に対応して、かれらが上陸し、探検した地域の所在地の議論にかかわるのである。これは、サガの記述を根拠として、かれらの辿った航路の軌跡はどのようなものであったのか、という議論とも相関関係があり、この点についても議論が展開している。

このような諸論点をふまえ、ヴィンランドの所在地として、一方でカナダのニューファンドランド島北端、ランズ・オ・メドウ (L'Anse aux Meadows)、他方でアメリカ合衆国のメイン州 (Maine)、マサチューセッツ州 (Massachusetts)、ロー

ドアイランド州 (Rhode Island) などの大西洋岸のいずれかの地、その他、多くの見解が呈示されている。ヴィンランドの所在地やその探検をめぐる議論は、サガの記述自体の分析による議論の他に遺物、住居跡、古地図などを証拠や手懸りとして、議論されている。本稿では遺物、住居跡、地図など、その主張の根拠とされる対象にどのようなものがあるか、紹介する。

【A】 記述史料

ヴィンランドに言及した記述史料には次のものがある。

(a) 『ハンブルグ大司教史 (Gesta Hammaburgensis Ecclesiae Pontificum)』(一〇七五年)^③

「その他に彼(デンマーク王―筆者注)が語ったところによれば、多くの人々によって、あの大洋でヴィンランド(Winland)と呼ばれるもう一つの島が発見されたという。というのも、ここでは素晴らしいワインを産み出す葡萄が自然に繁っているのである。種子を播かないのに穀物も豊富である、ということもおとぎ話のような空想などではなく、デンマーク人たちの信頼に足る筋に基づいて知ったのである。その島の向うには、もはやその大洋に人の住める土地はなく、耐えがたい氷と完全な闇となっているのである、と彼は語った。^④」

(b) 『植民の書 (Landnámabók)』(一一〇〇年)

「ヘグナ(Hogna)の息子ウルフ(Ulfr)はソルスカフィヨルド(Porskaftarför)とハフラフェル(Hafrafells)の間の、すべてのレイキヤネス(Reykjanes)を取得した。彼はビヨルグ(Björgu)を妻とし、その息子アトリ(Atri)はソルビョルグ(Porbjörgu)を妻とし、その息子マール(Már)はソルコトラ(Porkotlu)を妻とし、その息子がアリ(Ari)であった。」彼は白人の国(Hvitramannalands)まで(進路を逸れて)流された。それをある者は大アイランドと呼んでいる。それは大洋の西方ヴィンランドの地(Vinland inn góða)の近くに位置している。それはアイランドから西方六日間の航程にあるといわれている。^⑤」

(c) 『アイスランド人の書 (Íslendingabók)』(一二二四年)

「かれら(アイスランド人―筆者)はこの地(グリーンランド―筆者)の東部と西部の両方に、人間の住居や革製ボートの破片と石器製作場を発見した。このことから、そこはヴィンランド (Vinland) に住み、グリーンランド人がスクレーリング (Skrælinga) と呼んでいた民族が住んでいたことがわかる。」^⑥

(d) 『飢餓を喚起するの書 (Hungurvaka)』(一二世紀前半)

「ジョン (Jon) はその後ヴィンランド (Vinland) へ渡り、そこで多くの人々をキリスト教徒に改宗させ、最後には殉死して神(の元に)赴いた、ということとは真実であると信じている人々もいる。」^⑦

(e) 『ヘイムスクリングラ (Heimskringla)』(一二世紀前半)

「オラブ王はその春レイフ・エリクソンを、キリスト教を布教するためにグリーンランドに派遣し、そして彼はその夏グリーンランドに行った。彼は大洋で破損した船の、難破船にしがみついている乗組員たちを救った。彼はまたすばらしいヴィンランド (Vinland the Good) を発見し、夏にグリーンランドに帰り、そこに神父と他の教師を連れてゆき、かれらと一緒にブラタリーズに行き、彼の父エリクのところで泊まった。」^⑧

(f) 『エイル谷の人々のサガ (Eyrbyggja saga)』(一二世紀中頃)

「エイルビュッギヤとアールプタフィヨルドの人びとの和解の後、ソルブランドの息子たち、スノリとソルレイヴ・キムビはグリーンランドへ行った。(グリーンランドの氷河の間のキムバヴァーグを彼は知っていた。)そしてソルレイヴは高齢になるまでグリーンランドに住んだ。だがスノリはカルセヴニとともに、すばらしいヴィンランドへ行った。そして彼らがそのヴィンランドでスクレーリングと戦った時、この極めて勇敢な男スノリの息子ソルブランドは倒れた。」^⑨

(g) 『キリスト教徒のサガ (Kristni saga)』(一二世紀中頃以後)

「春ビヤルティとギズルはアイスランドへ行く船の支度をした……。その夏オーラーヴ王は国を出て南のヴィンドランドへ

行った。その頃王はレイヴ・エイリクスソンを信仰を布教するためにグリーンランドへ派遣した。その時レイヴはすばらしいヴィンランドを発見した。彼は大洋で難破した人びとをも発見した。そのため彼は△福の神レイヴ▽と呼ばれている。^⑩」

(h) 『グレティルのサガ (Grettis saga)』(一二世紀末)

「長白髪のアースムンドはビヤルグに大きな堂々とした屋敷をつくり、多くの者たちをかかえていた。……彼とアースデイー
スの間には次の子供たちがいた。……娘の一人はソールディースといい……。もう一人の娘はランヴェイグといった。彼女は
ヴィンランド人ソールハルの子ガムリと結婚した。彼らはフルータフィヨルドのメルルに住んだ。^⑪」

(i) 『アイスランド年代記 (Íslandske Annaler)』(一五七八年)

「一二二二年グリーンランドの司教エイリクはヴィンランドを探しに (leitaði [fór at leita] Vínlands [Vindlands])^⑫
出かけた。

一三四七年それからグリーンランドから、アイスランドの小さな船より小さい船 (en smá Íslandsfgr)^⑬ がやって来て、
ウトラ・ストラウムフィヨルドに入ったが (Straumfjörð inn ytra)^⑭、それは錨を欠いていた。そこには一七人が乗船し
ていたのだが、かれらはマルクランドまで航行したものの、その後こちらへ(嵐で)流されたのだった。

なお、「エイリク」とは Eirik (Upsi) Gnúpson と考えられている。しかも、彼は「ヴィンランド・マップ」(本章
【B】(e) に登場する「エイリク」であるとし、議論は、「エイリク」の経歴の検討と関連させつつ、「ヴィンランド・
マップ」の信憑性の賛否にまで及んでいる。^⑮)

(j) 『アルフレッドのアイスランド (Alfræði Íslenzk)』(一二三八年)

「グリーンランドの南にヘルランド、それからマルクランドがある。ある人びとがアフリカの延長と考えているすばらしい
ヴィンランドまではそこから遠くない。そしてもしそうであるなら、ヴィンランドとマルクランドの間には大洋があるこ

となる。噂では、ソルフィン・カルルヴニは木の *husanotra* (船首の飾りか?) をつくり、それからすばらしいヴィンランドを探しに出かけ、その国だと考えられる所に着いたが、国の性質を知ることができなかった。△福の神レイヴ▽が最初にヴィンランドを発見した。そしてそれから大洋で苦難に陥っている商人を見つけ、神のご加護により彼らの生命を救った。そして彼はキリスト教をグリーンランドに齎らした。そしてそれはそこで非常に盛んになったので、ガルザルという所に司教座が置かれた。^⑮

なお、『グリーンランド人のサガ』、『赤毛のエリクのサガ』、『ギスリの年代記』で言及されている箇所についてはすでに掲げておいた。^⑯

【B】 地 図

(a) アイスランドで、一二五〇年以前に書かれた案内書に基づいて、一二〇〇年頃に記述された『地誌 (Veidarisir ok borgaskipan)』によれば、ヘルランド (Helmland)、『マルクランド (Markland)』、『ヴィンランド (Vinland)』は、『グリーンランドの南方洋上にあり、前二者は島であるものの、後者はアフリカ大陸から突き出た半島と考えられていた。^⑰ ビョルンボー (A. A. Björnbo) は一九二二年、当該史料およびその他関係文献を参考として、北歐中世期 (一二一―一四世紀) の人々が想定していたと考えられる地理的認識を地図として描いた。^⑱

(b) ヴィンランド (Vinland)、『つきの Promontorium Winlandie (ヴィンランド岬)』の文字が記入されている地図として、いわゆる「スカルホルト地図 (Skálholt Map)」^⑲がある。これはステファンソン (Sigurður Stefánsson) の制作によるものである。但し、これの原本は紛失しているものの、ソルラクソン (Þóur Þorláksson) による、一六六八年以降のコピーがある。当該コピーには一五七〇年という年代が記入されているものの、一五九〇年以前には遡りえない。

当該地図には八篇の説明文が添えられている。とりわけヴィンランドに関する説明文、"A"、"B" には次のように記述さ

れている。²²⁾

“A” イギリス人 (Angst) はこれら (スクレーリングの国) にやって来た。その名称は、まるでかれらが太陽や寒さによって焼かれることによって、縮みそして乾ききってしまったかのような、乾燥に囚るものである。

“B” これら (スクレーリングの国) に非常に近い所にヴィンランド (Vinlandia) があるが、これはその良好な土壌と豊富な好都合な品々の故に、恵みの地 (Bonam) と呼ばれてきた。われわれの国の出身者は、この土地は南部は大洋によって境界となっていると考えた。しかし最近の (学者の) 情報結果から、わたしは、それはアメリカ (America) とは海峡あるいは入江によって隔てられている、との結論に達した。

なお、当該地図は、『エリクス・サガ (Eiríks saga)』に基づいて描かれた「ストーム (G. Storm) 説」というよりは、既に存在していた、なんらかの地図を踏襲したようである。²³⁾ つまり当時得られていた新しい知見が必ずしも反映されていないのである。

(c) “Promontorium Vinlandiæ Bonæ forte Vinlandiæ pulchræ & c (恵みのヴィンランド、つまり美しいヴィンランドの岬など)” の語が記入されている、もう一つの地図がある。これは一六〇五年ころに遡る、レーゼン (Hans Poulsen Resen 一五六一—一六三八年) によって描かれたものである。²⁴⁾ 当該地図はいわゆる「スカルホルト地図」〔本稿前記(b)〕とは異なり、当時の新しい知見 (Mercator の地図—一五六九年、Michael Lok の地図—一五八二年など) を参考にしながら制作されたと考えられる。したがって、当該地図は “Skalholt Map” を模写した、あるいは当該地図から窺い知ることのできるアイスランドの古地図を利用した、などの提起された問題点については検討の余地は残しつつも、必ずしもこの点は肯定的とはいえない。

(d) 一九四五年ヴルベス (J. Verbes) はエスタゴム (Estergom) で雑然とした書類の中から、いわゆる「スカルホルト地図」に類似した一枚の地図を発見し、それをゼプシー (Géza Szepssy) に売却した。これは現在ブダペスト (Budapest) の

ハンガリー国立図書館に保管されている。

さて当該地図を歴史家のゴルフィー (György Györfy) / ルーン研究家のヴェサリー (István Vesáry) / 司書のボーダン (István Bogden) が調査したところによれば、これに記入されているラテン語は不正確であり、ルーン文字は一八世紀後半に属するなど、贋物であると判明した。これはいわゆる「スカルホルト地図」を参考として描かれた、なんらかの地図に基づいて制作されたと考えられるものの、その具体的範本は不明である。²⁵⁾

(e) 一九六五年、エール (Yale) 大学は、五年間のブリテッシュ博物館 (British Museum) との共同作業の後、「The Vinland Map and the Tartar Relation」という書名の書物を刊行した。議論の渦中たる「ヴィンランド・マップ (Vinland Map)」は、縦二七・八センチメートル、横四一センチメートルの、羊皮紙に描かれたものであり、その地図にはグリーンランド、マルクランド、ヘルランドが描かれているのみならず、ヴァンランドはビヤルニとレイフ・エリクソンの一行によって発見された旨が記入されていた。次の文章がそれである。

「ビヤルニとレイフ・エリクソンの一行は神の御心により、グリーンランドから、西の大洋の最も遠くに横たわる部分に向けて南へ、流水の間を南に向かって航行し、長い航海ののち、新しい大地を発見し、土地が非常に肥沃で、葡萄の木が生えていたので、『ヴィンランド (葡萄の島)』と名づけた。

ローマ・カトリック教会の教皇特使であり、グリーンランドおよびその周辺の司教であるエイリークは、全能の神の御名のもとに、最も聖なる我らの父パスカル (つまり、一一一八年に死去した教皇パスカル二世) の最後の年に、このきわめて広大かつ豊かな土地に達し、夏と冬をそこで過ごした。そしてその後、北東のグリーンランドへ戻ったあと、慎しみ深くも彼の上司の意志に従い、先へ進んだ。²⁶⁾」

当該地図は、当時には存在していたものの、今は消失した地図、あるいは経験的知識ないしサガなどの資料を利用することにより、一四四〇年頃、上ラインラント地方 (バーゼル) で作成されたと考えられた。この地図が信頼できるものであるとす

るならば、その歴史的意味の第一は、およそ一〇〇〇年頃レイフ・エリクソンが「ヴィンランド」へ航海したと語るサガの記述を確証するものであり、一四九二年コロンブスによるアメリカ大陸の発見（実際は、後にサン・サルバドルと称された、バハマ諸島中のワットリング島に上陸）よりも、およそ五〇〇〇年近く遡ることになる。第二は、当該地図が作成されたとする一四四〇年はコロンブスによるアメリカ大陸の発見の年よりも、およそ五二年を遡る、という点である。いずれにせよ、当該地図は、コロンブスがアメリカ大陸の第一発見者であるという定説に再検討を促さずにはおけない史料といえる。

三七、〇〇〇部の売上げを得た、この高価な書物が刊行された翌年「ヴィンランド・マップ」に関する国際会議が、スミソニアン研究所 (Smithsonian Institution) によって開催された。参加者は概してその信憑性を認めた。しかし地図学者は懐疑的であった。一九七一年には会報が刊行された。しかし一九七四年一月二六日エール大学は、使用されたインク（色素剤・ C_{20} ・二酸化チタン）の化学的分析に基づき、そのインクは一九二〇年以降から利用された、近代的科学物質であり、したがって第一次大戦以前には遡らない、という結論を得た旨を公表した。地理学者は当初からグリーンランドの輪郭について、当該地図が作成されたとされる一五世紀中頃を相前後する年代における地理的認識とは突出して、余りにも正確でありすぎるなどの点において疑問を呈していた。以上の諸点などから、これはユーゴスラビアの神学校教授ルカ・イエリク (Luka Jelenc) を発端とする贋物ではないかとされた。

上記のごとく、当該地図の信憑性は否定されたものの、その後においても研究は継続し、エール大学による研究書の発刊後三〇年、一九九五年再び当該地図についての研究書が刊行され、その信憑性を主張している。上記色素剤について言えば、これが近代的製法によって得られる以前に、すでにそれが事実上使用されていたということも充分ありうるものであり、酸素は、それが発見される以前において人々はそれを呼吸していたのではないかと主張している。グリーンランドの輪郭が「近代二〇世紀の地図と余りにも類似して、むしろ良すぎて真実味がない (far too similar to a modern twentieth-century map; "too good to be true")」(A. Davies) のは後世の贋物の証拠である、という主張に対しては、それは現在では計り知れない、当

時の優れた情報・技術などによるものであり、そうした可能性は全く否定することはできないという意見も見られる。²⁷⁾

【C】考古学的資料

(a) ヘーネン碑文

ノルウェーの南部、リングゲリケ (Ringerike) の農場ヘーネン (Hønen) から発見されたといわれる石の碑文。現物はな
いものの、一八二三年に模写された、高さ一・二五メートルの碑文がある。そこには次の記述が刻印されている。

「(彼らは) 大海原に出た。身を乾すための布、および食料を必要とした。遠くヴィンランド (Vinland) の方向に進み、
人の住まない氷 (の海) に進んでいった。幸運は悪運にとって代られ、一人は早やばやと命を落した。²⁸⁾」

ブッゲ (Sophus Bugge) の見解によれば、これは一〇五〇年以前のもと考えられる。したがってヴィンランドに関する最初の記述史料たるアダム・ブレメンシス (一〇五七年) より更に古く、最も古い証言となりうる。但し、これに反する見解²⁹⁾のあることは言うまでもない。

(b) 通称「ヴァイキング・タワー」〔ニューポート・タワー (Newport Tower)〕

ロードアイランド (Rhode Island) 州ニューポート (Newport) にある円筒状の構造物で、直径および高さが、それぞれ七・六メートル、八メートルである。これは、かつて中世 (但し、十二世紀以前に遡らない) 的根跡を備えた、北欧系の円筒型教会であったと解されていた (Carl Christian Rafn)。しかし二〇世紀中頃 (一九四九—一九五〇年) の発掘調査によって (W. S. Godfrey Jr.)、十七世紀中頃の植民地時代に、多分総督アーノルド (Benedict Arnold) によって建設されたもので、見張り台、あるいは倉庫として使用された構造物であると考えられている。³⁰⁾

(c) ホーリン・ポンド

F・J・ポール (Frederick J. Pohl) セロニズ岬 (Cape Code) 近接のホーリン・ポンド (Follins Pond) など

レイフ・エリクソンが野営し、ゴクスタ (Gokstad) 型の船が繫留された痕跡を発見したと主張した (一九五五年^⑪)。しかしレイフ・エリクソンがヴィンランドへ航海したと考えられる頃にはすでにクナル船 (Knorr) に移行していたと考えられるのみならず、そもそも繫留跡とされる場所の杭を、放射性炭素年代測定法で調べた結果は、「近代 (modern)」であった^⑫。

(d) ケンジントン石碑

ミネソタ州 (Minnesota) のダグラス郡 (Douglas) のケンジントン (Kensington) の近郊で、一八九八年スウェーデン移民のオーマン (Olof Ohman) は、ルーン文学の刻印された、その嵩八〇×四〇×十五センチメートル、その重量九二キログラムの泥質硬砂岩の石碑を発掘した。その碑文は次のような記述であった。

「八人のスウェーデン人と二人のノルウェー人がヴィンランド (Vinland) から西方へ探険の旅をした。私たちはこの石碑から北へ一日航程の、岩の多い二つの小島の近くで野営した。ある日私たちは魚を捕るために出かけたが、帰ってみると仲間の一〇人が血に赤く染まって死んでいた。神よ不幸から (私たちを) 守りたまえ。この島から十四日の航程 (の地) に、海辺に一〇人が残り、私たちの船を守っている。一三六二年^⑬。」

ここに掲げた碑文の内容によれば、ノルマン人がヴィンランドからセント・ローレンス川 (River St. Lawrence) と五大湖を越え、あるいはハドソン湾 (Hudson Bay) からネルソン川 (Nelson River) 、ウィニペグ湖 (Lake Winnipeg) 、レッド川 (Red River) を経由して北米の奥地にまで進出したことを示している。しかし、ノースウェスタン大学 (Northwestern University) のカーム教授 (G. O. Curme) の調査によって、碑文は一三六二年の日付を語っているものの、碑文自体は近代に入ってから刻印された贗物であると判断された (一八九九年)。しかしその後これを真物と考えるホランド (Hjalmar Rued Holand) の活動などによって、その評価が変更された。とりわけ、スミソニアン研究所 (Smithsonian Institution) は、一九四八年『National Geographic 誌』とも提携し、同研究所の考古学部門の主任、ジャッド (Neil M. Judd) は

該碑文が、「コロンブス以前に遙か北アメリカへ旅をした白人によって刻印されたことを示している」^④とし、その信憑性を承認する趣旨の声明文を本人の写真入りで公表した。一九四九年には同研究所、民族学部門の主事、スターリング博士 (M. W. Stirling) は「北米で最も重要な考古学的遺物」^⑤であると公言した。かくして当該石碑は一九四八年二月十七日から一九四九年二月二五日まで同研究所で陳列、公開された。雑誌『スペクulum (Speculum)』は一九五〇年七月号で当該石碑について肯定的論文を掲載した^⑥。さらに一九五一年八月十二日ダグラス郡アレクザンドリア (Alexandria) にはそのための記念碑が建立されたのであった。このように一時期にはその真実性が喧伝されたものの、刻まれたルーン文字は、古代から十九世紀に及ぶ異なる時代のそれぞれを特徴とする字体であり、しかもその刻字は発見者たるオーマンとその隣人たちが彫った可能性が高いのである。当該石碑を「アメリカ誕生の地、アレクザンドリア (Alexandria. Birthplace of America)」として謳い、教科書に登載させるなど社会的 (民族意識の昂揚) に利用することの当否は別にすれば、現在の学術的研究はその信憑性には否定的である^⑦。

(e) 斧

ケンジントン石碑を傍証するものとして提示された諸種の武器の中で、とりわけミネソタ州のモーラ (Mora) およびリパブリック (Republic) で発見された斧は、中世北欧のヴァイキングのもの^⑧とされた。しかしこれは戦闘用の武器ではなく、木材の伐り出しに使用する道具であり、紛れもなく後世アメリカ製である^⑨。

(f) 鉞

これらは、もし半円形をした刃の部分があれば、鉞 (halberd) というよりはむしろ斧というべき形態^⑩をしている。アメリカ合衆国の全域、とりわけミッドウェスト (Midwest) とアーカンソー (Arkansas) に集中的に発見される。ミッドウェストで発見された七個は、ヴァイキング期の、戦闘用武器と解された。しかしこれらは実用のもではなく、祭式用のもであった。ミネソタ州で発見されたそれらは、北欧中世期のものであるとホルランド (Hjalmar Holand) は主張した。しかし

それらは一五〇〇年以降のものであることが判明した。そもそもノルマン人は一五〇〇年以前にはこのようなものは使用していない。したがってそうしたものの製作年代は一五五〇年以降である。これら発見された銚は、概して一八八〇年代にタバコ宣伝の一翼を担うべく、あるタバコ会社で製作された圧搾タバコのカッターである。これらは本来台座とは蝶番で結ばれていたが、その蝶番がはずされ、しばらくは手斧として使用された後、土中に放棄されたにすぎなかったと考えられる。⁴⁰⁾

(g) サザランドの剣

アイオワ州 (Iowa) のサザランド (Sutherland) で出土した、長さ二二・五インチの剣はヴァイキング期のものとされた。しかし調査結果によれば、その長さは中世の両手で扱う、平均的な剣よりも短かいのみならず、柄の模様は一八〇〇年前後に属する。これは、一七九四年マース陸軍士官学校 (Military Academy Ecole de Mars) のために、フランス人ディヴッド (Jacques Louis David) が立案したものであった。同種の剣は後にフランス軍によって使用された。⁴¹⁾

(h) ヤーマス石

ノヴァスコシヤ (Nova Scotia) のファンデー湾 (Bay of Fundy) の海岸で発見され、一八〇四年以降知られている、三〇×二九×二九インチの石 (Yarmouth Stone) である。一八八四年この石には「ハコ (Hako)」の名前が読みとれ、彼はトルフィン・カルルセフニ (Thorfinn Karlsefni) によるヴィンランドへの航海に参加した一員ではないかと思われた。しかしそれは偶然の刻印、あるいはインディアン⁴²⁾の呪文にすぎないのではないかと解されている。

(i) ダイトン岩

マサチューセッツ州、バークレー (Berkeley) のタントン (Taunton) の近くで発見された、四×一〇フィートの丸い形をした砂岩である。これには数人 (五〜六人、あるいはそれ以上) の人の姿、馬、鹿、ヒョウなどの四足獣、地図、各種の文字 (フェニキア文字、ルーン文字、中国文字、モンゴル文字、日本文字など) が刻印されているものとして、一六七七年以来さまざまな解釈が試みられてきた。本稿の課題に最も近接した解釈は、その当否は別にすれば、ラフン (Carl Rafn)

とマグヌセン (Finn Magnusen) によるものである。それによれば、これはトルフィン・カルルセフニ (Thorfinn Karlsefni) の入植地、つまりヴィンランドの様子を描いたもので、そこで出生した彼の息子であるスノリ (Snorri) やかれらと敵対したスクレーリング (Skrælings) も描かれているという。しかし現在では、これはノルマン人に関係したのではなく、アルガンキアン・インディアン (Algonquin Indian) によるものであったと考えられている。^{④③}

(j) ノーマンズランド石

一九二〇年頃、マサチューセッツ州、マーサス・ヴィンヤード島 (Marthas Vineyard) のノーマンズランド (No Man's Land) 海岸で一つの石が発見された。この石にはルーン文字で、レイフ・エリクソン (Leif Eiriksson) と西暦一〇〇一年 (MD) が刻んであると主張された。しかしこれはまったくの悪戯であったと考えられている。^{④④}

(k) ビードモア遺物

一九三六年ドッド (James Dodd) は剣、手斧、発音器具 (馬の鈴) など三点を国立オンタリオ博物館 (National Ontario Museum) へ五〇〇ドルで売却した。これらは一九三〇年五月オンタリオ州 (Ontario) 西部、サンダー湾 (Thunder Bay) 近郊のビードモア (Beadmore) で発掘されたものと主張された。確かに剣は一〇世紀初期、手斧と発音器具は十一世紀のもので、北欧起源である。したがって問題の核心は、ノルマン人自身がこの頃当地に渡来し、これらの品々をもたらした、という結論を下しうるものか否かであった。調査の結果、次のことが判明した。一九一八年その父親 (Christian Bloch) から古い武器類の收藏品を相続していた、ノルウェー人移民であったブロック (Jens Bloch) が、一九二三年問題の品々を、ノルウェー人村のあった、当時ポート・アーサー (Port Arthur) と呼ばれていた地域へノルウェーから持込んだというのが事実経過であった。ちなみに、一九六五年現在では、当該品々は上記博物館において所在が不明であるという。^{④⑤}

(l) 繫留穴

岩に穿たれた直径およそ一インチ、深さおよそ五〜七インチの穴。およそ三〇個はケンジントン周辺で、他のいくつかは

コッド岬で、その存在が報告されている。これはノルマン人が船を迅速に、そして音をたてずに繫留し、また解き放つための穴であったと解された。しかしその穴は現実的にはそのような目的としては機能せず、穴をあける作業自体が音をたて、人に感知される。しかもそうした慣行は北欧には知られていなかった。いうまでもなく、定期的な、あらかじめ人に周知される船の離発着用としては繫留のための道具は岩にはめ込まれていた。この穴は北米大陸へ人々が入植した頃、建築用石材が大量に必要とされ、その採石を得る方法として黒色火薬による爆破のために一旦は穿たれ、その後放置された穴であったと考えられる。あるいは漁網を固定するための穴と考えることもできる。いずれにせよ、中世ノルマン人の根跡としてこれに結びつけることは妥当でない。^{④6}

(m) メイン・コイン

一九五七年メルグレン (Guy Melgren) とランゲ (Edward Runge) はメイン州 (Maine) のペンブスコット湾 (Penobscot) に面した、およそ一〇〇〇年〜一四〇〇年ころの、原住民の居住跡で直径一六・四ミリメートルの貨幣を発掘した。一年後アメリカ貨幣協会は、それはイングランド製でステイヴン王 (Stephen) (一一三五―一一五四年) のために铸造されたものであると判定した。しかし一九七八年ファーマー (B. F. Farmer) の論文を契機として再考がなされ、一九七九年スービー (P. Seaby) 、スコロー (Kolbjörn Skare) は、それはノルウェー王オラフ・キール (Olaf Kyrre, 一〇六七―一〇九三年) の頃、一〇六五年から一〇八〇年の間に铸造されたものであると発表した。一九七九年メイン州立博物館 (Maine State Museum) は、その遺跡の再発掘を試みたものの、当該遺跡における北欧起源を確認するなんらの痕跡も発見することはできなかった。

当初当該コインは、ノルマン人の足跡、たとえばおよそ一一二一年「ヴァインランドの探索に出発した」とされるグヌップソン (Eiríkr Gnúpson) 、あるいは「マルクランド」つまりラブラドル地方と交易をしていたと解せられる船 (一三四七年) (「アイスランド年代記」^{④7}) の存在を示していると考えられた。しかし現在では、たとえば、(イ) ネイティヴ・アメリカン

(インディアン) がグリーンランドあるいはランズ・オ・メドウ (L'Anse aux Meadows) から持込んだ、(ロ)当該遺跡ではドーセット・エスキモーとの交渉の痕跡を示していることから、当該イヌイット(エスキモー)を仲立ちとしてノルマン人から由来した、(ハ)ノルウェー船が当該遺跡の沖合で難破したことによる、(ニ)あるいはまったくの贗物である、などいくつかの推測が試みられているにすぎず、その真相は不明である。但し、ヴァイキング期のコインはグリーンランドやランズ・オ・メドウでは発掘されていない。真相究明の困難性は、発掘した兩人が素人であったため、その発掘状況がきわめて不明、不良であることなどにも因っている。^{④⑧}

(n) ウォーケガン酒杯

一九五二年メイソン (Ronald Mason) はシカゴの北方、ウォーケガン (Waukegan) 市の、シンガン湖畔で角製酒杯を発見した。二〇年後ランドヴェルク (O. G. Landverk) は刻印された文字を分析し、その読解を試み、「一三二七年十一月オーディンは(ルーン)文字を刻んだ。」と読んだ。しかもこれはヴィンランド地図、ケンジントン石碑の碑文とも関係し、信憑性のあるものとして理解した。しかしハーゲン教授 (Einar Haugen) はこれに疑問を持ち、マニトバ大学 (University of Manitoba) のベッサソン (Haraldur Bessason) に相談したところ、これは一五九〇年頃マグヌソン (Thórdur Magnússon) によって考察された、十八〜十九世紀に流行した韻文であることが判明した。さらにレイキャヴィク (Reykjavík) の歴史博物館長マグヌソン (Thór Magnússon) は、その刻印者をほばラルソン (Hjálmar Lárusson) であると特定した。^{④⑨}

(o) スピリット・ポンド石

一九七一年エリオット (W. J. Elliot) はメイン州の海岸、ポプハム・ビーチ (Popham Beach) のスピリット・ポンド (Spirit Pond) で四個の石を発見した。そのうち三個の大きさは、それぞれ五×六インチ、六×七インチ、八×一〇インチであった。最後の一個は一九七五年になって公表された。表面にはルーン文字、船、動物、人面、植物、絵文字、地図、十

字架などが刻印されていた。内容は一〇一一年のヴィンランドへの航海に係る記述であると解され、注目をひいた。しかし一八九七二年ホーゲン (Einar Haugen) は、詳細に研究し、文字の分析とその訳出を試みた結果、それは一九三二年以後に刻まれたものであると判断した。しかもケンジントン石碑に通じる、意図的な偽造であった可能性が高いのである。その一〇年後ワールグレン (Erik Wahlgren) は再びその解読を試み、これらは一九七〇年に近接する年代のものであるとの判定を下した。⁵⁰⁾

【D】ランズ・オ・メドウの発掘

イングスタッド夫妻 (Helge Ingstad, Anne Stine Ingstad) は一九六一年～一九六八年カナダ、ニューファンドランド島 (Newfoundland) の北端、ランズ・オ・メドウ (L'Anse aux Meadows) における七回の発掘調査により、ノルマン人がおよそ西暦一〇〇〇年頃当地において居住した痕跡を確認した。夫妻はそれより以前一九五三年、九八六年頃赤毛のエリクによって開拓されたと言われるグリーンランドにおける二つの入植地、東部入植地および西部入植地の発掘調査を試み、その知見を持っていた。サガによれば、グリーンランド人は東部入植地のブラッターリード (Brattalio) から出発し、数日の航海の後「ヴィンランド」に辿り着き、探険し、居住したという。その「ヴィンランド」とはどこに存在するのか、これが夫妻の課題であった。一九六〇年上空および海上から、その可能性を秘める候補地を調査し、エパァウス湾 (Egges Bay) を望むこのランズ・オ・メドウをその最有力候補地とした。⁵¹⁾

一九六一年～一九六八年の発掘調査における主な発見は八戸の家、四戸のボート小屋、一基の炭焼き窯、鉄敷、石鹼石製紡ぎ車 (糸車)、青銅製円環付きピン、針用砥石などであった。しかも当該遺跡から出土した品々についての放射性炭素年代測定によれば、およそ西暦一〇〇〇年がその平均的数値であった。これはサガの描く歴史的背景に合致せるものであった。

さて、発掘された遺跡の概要は以下のとおりである。ハウスAは、全長二四メートル、四室の部屋に二つの入口を持ち、北

欧ヴァイキング期に典型的なロング・ハウスである。しかもここでは北歐起源を示す青銅製円環付きピンが発見された。これはグリーンランドのナルサク (Narsaq) の農場、アイスランドのイスレイフスタディール (Isleifstadir)、ノルウェーのオーマ (Oma) (Time, Rogaland) においてみることのできる、それに類似した家屋形態^③である。またこの家屋の外側には豚の骨が発見された。これは狩猟、漁労の他に家畜飼育が行われていたことを裏付けるものである。これは滞在生活を長期的に維持しようとする意図を具体的に示す徴証といえる。

ハウスBは一部屋から成るロング・ハウスである。整然として工夫された床底には、平板な石が敷かれ、石組みの炉が備わっていた。この炉の形態は、ブラッタリードにみられるそれに酷似し、グリーンランドの初期入植地にみられるものであり、その年代を窺わせる。さらにその炉には料理用ピットが掘られ、しかもそこからは炭と混じった鉄の鋳滓が発見された。これは沼鉄鋳から鉄を採るための方法であり、ノルマン人にのみ知られた技術であった。

ハウスDには北歐型のホールがあり、床の中央には炉が掘られ、壁に添ってベンチが置かれていた。炉の隅にはハウスBと同様に燃えさし用のピットがあった。これは夜間燃えさしを保存するための、ノルマン人に特有な工夫である。それぞれ断片ではあるが、鉄製の釘と鋏、銅、骨製の針なども出土している。

ハウスFは二〇×十五メートルの、六室から成るロング・ハウスで、ハウスDと同様にトルサルダルー (Þjórárdalur) 型と呼ばれ、アイスランドのステング (Stöng) にその典型^④をみることのできる建物であった。料理用ピット、燃えさし用ピット、大きな平板を敷いた炉などはその特徴である。また石組みの部屋、土盛りのベンチなども他の家屋にみられた設計、設備であり、ブラッタリードに酷似せる形態であった。とりわけ当該家屋で重要な出土品は石礮石製の紡車である。これは北歐ヴァイキング期以降に、北歐文化圏にみられるものであり、グリーンランドで出土した遺物と酷似している。他に重要な出土品は、石製ランプ、針用砥石、鉄製の釘と鋏 (リベット) などである。なお、紡車の出土は、これが北歐中世の最も一般的なノルマン人の遺跡^⑤であることを示しているのみならず、同時に出土した針用砥石とあわせてとりわけ女性の存在を物的に証明するも

のといえる。これはハウスAの脇で発見された豚の骨、ハウスDで出土した骨製の針などとともに、ここでの生活が長期的な展望⁵⁶⁾に立っていたことを物語っている。

ハウスEは間口三・七五メートル、奥行三・二五メートルの小さな小屋であった。その円形屋根は、現在でもノルウェーやアイスランドでも見られ、とりわけアイスランドのケルドル (Keldur) の最も古い農場⁵⁷⁾にその例をみることができる。

当時生活を維持していくうえで、動物や魚類の骨を利用して道具を製作したとはいえ、鉄製の道具はとりわけ重要であったと思われる。上述のごとく家屋内の炉で発見された鉄の鋳滓は鉄鍛冶が存在していたことの痕跡を窺わせるものである。しかしそれ以上に重要にして、決定的な徴証は、家屋群とはブラック・ダック (Black Duck) 川を挟んで対岸に確認された窯と鋳炉、鉄鍛冶の仕事場の遺跡であった。しかもこれらの施設が小川を挟んで設けられていたのは、万一の際家屋への延焼を防ぐための措置⁵⁸⁾であった。

また家屋群とは標高差およそ五フィート低いレベルの地点に確認されたポート小屋は、家屋内で発見された鉄製釘や鋌とともに、船の修理を行うために重要な役割を果たしていたと考えられる。このような施設の存在は、一般にヴァイキング期の入植地にみられる、北欧社会の典型的且つ特徴的景観⁵⁹⁾である。

上記に言及した当該遺跡の住居および関連施設から出土した炭、動物の骨、芝草など、およそ二二件のサンプルについて、放射性炭素による年代測定が試みられた⁶⁰⁾。その測定結果によれば、その数値は西暦九九〇プラス三〇、マイナス十五年であった。これは当該遺跡が、家屋の形態学的見地および遺物の類型学的比較検討により確認された、北欧起源という論拠に加えて、年代的にも北欧ヴァイキング期に合致していることを科学的に実証するものといえる。これはサガをはじめとする文献的史・資料との整合性を肯定的に評価する場合の、その有力な根拠の一つといえよう⁶¹⁾。

第四章 むすび

北欧中世の歴史を飾るヴァイキングの諸活動のうち、とりわけ北米大陸に向ったとされる活動を中心に考察した。しかもその活動と議論の核心は「ヴィンランド」と定め、その点に関する文献学的、考古学的考察を紹介した。考古学的遺物による考察は、ランズ・オ・メドウで実施された、専門家による学術的発掘調査を除いてはその多くが信憑性に欠けるものであった^①。敢えていうならば、それは学問的考究であったというよりは、少なからず民族的動機（感情）がその背後にあったように思われる。他方、文献学的考察は資・史料の記述からその推察を試みる以外に方法はなく、概して蓋然的結論の域を出ず、その主張の確かな根拠を得ることはできなかった。とりわけ文献に基づく議論には現今においても甲論乙駁が展開されている。その一端を次に紹介することとする。

まず、サガが言及する“vinland”の“vin”、つまり長母音の“i”から成る“vin”をいかに解釈するかという議論がある。“vin”は文字どおりでは「葡萄」あるいはそれから醸造された「葡萄酒（ワイン）」を意味する。しかしながらこれには次のような見解、解釈がある。つまり混乱の始まりはアダム・ブレメンシスが誤まって理解し、記述したことからは始まるというのである^②。それ以降、サガの記述者およびこれに言及する人々がことごとくその誤解を踏襲した、というのである。つまり本来は短母音の“i”を含む“vinland”すなわち「(牧)草地」を意味した筈であった。したがって一面の草地におおわれたランズ・オ・メドウはサガ等の文献の記述内容にとっては最も適合した地域である^③。このように主張する解釈はこれまでの研究動向からいえば大勢的な見解であったといえるであろう。しかしこれに対しては、たとえばワールグレン (E. Wahlgren) は次のように反論し、主張する。すなわち、ヴァイキング期のノルマン人は決して長母音の“i”と短母音の“i”を混同することはなかった。したがってこれは文学どおり長母音の“i”であり、その語彙は「葡萄の自生する土地」を含蓄する筈であると解釈する。かくして彼は野生の「葡萄」が自生する地域の検討に移る。そしてその地域は、ニューファンドランド

島より温暖な地方であるべく、それを考究するならば、さらに地理的に南方に下ったメイン州パサマクオッド湾 (Passamaquoddy Bay)、グランド・マナン島 (Grand Manan Island) などの地域からマサチューセツ州コッド岬周辺の一帯に "Vinland" は想定されるのである。^④

このように語彙の解釈とその意味する植物の分布による観点から、サガなどの記す「ヴィンランド」の所在地を確定しようとする方法論は、他にサガなどに言及されている、「鮭」の遡上することのできる川、森林、岩などの存在を裏付ける地域、遭遇したスクレーリング (Skraelings) は具体的にイヌイット (エスキモー) あるいはネイティブ・アメリカン (インディアンの) のいずれであったのか、などをめぐる議論とも連動しているのである。しかも "vin" はじつは「(牧)草」であると解す立場の研究者といえども、この語彙は本来の「葡萄」と解し、主張する立場からの批判に対しては、その「葡萄」の種類として、ニューファンドランド島を含め、その自生しうるセイヨウスグリ (gooseberry)、ツルコケモモ (cranberry) など多種類のベリー類を想定、提起することによって、その批判に対応し、自説を堅持しているのである。^⑤

さて、"vin" それ自体の解釈に基づき、葡萄の自生地をより温暖な地域に想定する見解は、したがってランズ・オ・メドウはサガの描くレイフ・エリクソンの越冬地としては承認しない。あるいは仮にその越冬地をランズ・オ・メドウに比定することと同意するとなれば、サガに描かれている「葡萄」発見の経過、つまり「赤毛のエリクのサガ」第五章ではレイフ・エリクソン、第八章ではスコット人、『グリーンランド人のサガ』第四章ではテュルキル (「Yrkir」) によってそれぞれ発見された「葡萄」に関する記述部分は「全くの創作 (pure invention)」であったと主張するのである。^⑥ あるいは彼らはそうでない植物を本来の藤木植物たる「葡萄 (tree-choking grapevine)」として「誤解した (misunderstanding)」と主張するのである。あるいは「葡萄」の記述を承認するならば、その発見場所自体については、越冬したとされる地点とは分離し、より南方に移動した地域であったと解すべきである、と主張するのである。^⑦ さらに当該見解はその批判の手を緩めない。すなわち、サガの記述にある「葡萄」からワインの醸造が暗示されている点について次のように主張する。アイスランド人がワインの醸造技術を

知ったのは一二〇三年であり、その技術がグリーンランド人に伝えられたのはそれ以後の筈であり、レイフ・エリクソンの年代より二世紀あまり後世のことである、と。^⑧

上記にみた葡萄の種類とその分布をめぐる議論は、サガの記述する他の動・植物のそれとも連動していた。つまりそれら動・植物相はまず当時の気候と密接に相関していた筈である。したがって、この点において、ランズ・オ・メドウと比較し、より温暖な地域をヴィンランドの有力候補地として主張する見解には根拠がある。しかしながらその見解に対しては、当時は一般に想定されているよりも温暖であったとするデータが提示され、反論がなされているのである。^⑨

“vin”をめぐり、その一端をみたように、文献学的史・資料に基づく議論では、主張するそれぞれの見解にとって、必ずしも自身の決定的な論拠を提示することのできないのが現状であると言ってよいであろう。この点は、ビヤルニ (Bjarni Herjolffsson) / レイフ (Leif Eriksson) / その他の人々が辿った航海に関する記述、つまりその所要日数、海流、気象などをめぐる議論についても同様のことがいえる。総じて文献をその根拠とする議論はその合意をみておらず、現在においても継続しているといつてよいであろう。

さて、一方において文献学的議論が上記のごとき状況にある現今にあって、他方考古学上の議論はどのような状況にあるのであろうか。とりわけここで考察の対象とすべきは、ランズ・オ・メドウにおける発掘調査とその結果である。結論的にいえば、合計七回にわたり、国際的なチームを編成して履行された発掘調査は、学術的観点から多くの部門を設け、それぞれの専門家が参加して実施されたことから、その調査結果の有効性、信憑性は大方の承認を獲得しているといつてよいであろう。つまりサガが記述するレイフ、カルルセフニ (Thorfinn Karlsefni) 等が上陸し、探険した地点たる“ヴィンランド”をランズ・オ・メドウに比定する立場の研究者はいうまでもなく、“ヴィンランド”をアメリカ合衆国の北東岸、カナダとの国境附近に比定する見解をその立場とする研究者、たとえば田・ワールグレンといえども“*The Vikings were there*”^⑩ と言い、レスダー (Else Roesdahl) は南方域への遠征の“*transit station (中継地点)*”^⑪ と解すなど、ランズ・オ・メドウにヴァイキング

期のノルマン人が上陸し、短期間であれ居住したということ自体は承認しているのである。但し、かれらの場合、サガが言及する「ヴィンランドそれ自体 (Vinland itself)」^⑫はその地点より更に南方にあったと主張しているのである。

本稿はサガ等が言及する「ヴィンランド」の所在地を追究する立場に立って、そこに提起されるさまざまな見解、議論を紹介した。しかしこうした立場とは異なり、「ヴィンランド」とはアフリカ半島、つまり「幸せの(半)島 (Fortunatae Insulae)」の先端に位置する場所と解され、さらにこれにスクレーリング、一本足の男、白人の国、葡萄(酒)等が結び付けられることにより、これらサガ等は御伽話的創作のちりばめられた記述であったという解釈のあることは前述した^⑬。しかし本稿はこのような立場は取らない。

本稿を締めくくるに当って二つの点を附言しておきたい。第一は、研究方法に関する問題点である。すなわち、これまでに積み重ねられてきた重厚な研究史つまりさまざまな学説と史料解釈、その相互の関係である。まず一方において、理路整然とした学説を堅持し、他方史料の分析、解釈に際しては史料の不備、問題点を指摘し、かくして論理の一貫性を貫く、という研究方法がある。これに反して、史料をあるがままに受容し、可能な限りその史料に基づいた分析を試みることにより、むしろ従来の「理論」、「学説」に柔軟性を持たせるのである。たとえば古地図に示されたグリーンランドの輪郭の「近代性」について、「理論」的立場からこれを「偽作」と決めつけるのではなく、むしろ現代人には想像できない中世人の「先進性」をそこに想定するなど、創造的な解釈、見解の構築に勉める、という研究方法^⑭である。もとより歴史研究は理論と史料の相互作用に基づいて行われるべきものであるとはいえ、本稿において触れたさまざまな学説、見解には、理論と史料それぞれに対する重点の置き方において、色のスペクトルのような濃淡の分布がみられたように思われた。本稿において改めて示された課題は、双方の論点をいかに調和させつつ、徹底させていくか、といういわば歴史研究の常道の再確認であった。第二は、「ヴィンランド」研究、論争の前提についてである。すなわち、本稿は上記のごとく、ヴァイキングの諸活動の中でとりわけ「ヴィンランド」への遠征に関わる資・史料とその議論を紹介することをその任務とした。この課題は、場合によれば、コロンブスを以

てアメリカ大陸発見の第一人者とするこれまでの通説に変更を迫るものである。しかしながらこれは、端的に言えば、ヨーロッパ人に関わる、ヨーロッパ人個有の問題である。つまりここに留意すべきは、この議論の帰趨がどうであれ、議論は、ヨーロッパ人がこれら大地に足を踏み入れる以前において、すでにイヌイット（エスキモー）にせよ、ネイティブ・アメリカン（インディアン）にせよ、かれらがその大地に生きて、生活を営んでいたという当然の事実は無視してはならず、これを前提とするものでなければならぬということである。したがって、ノルマン人による北米大陸発見の「名譽」をことさらに主張したり、そこへの「入植」はこれら原住民によって疎外されてきた¹⁵、と説く論調は、倒錯した身勝手な、移住者の側に立った論理といわなければならぬ。

註

第 I 章

① 筆者は一九九五年夏「ヴィンランド (Vinland)」と見做されているランズ・オ・メドウ (L'Anse aux Meadows) (カナダ、ニューファンドランド (Newfoundland)) に訪問し、それについて雑文を書く際に、その歴史的背景と研究状況に言及すべく、二三の文献を調べ、それをメモ程度に触れようとした。しかし「メモ」にしようとした部分は膨らんだため、むしろその部分は、訪問記(「ヴィンランド紀行」、『駒沢史学』四九号、一九九六年六月)においては一切言及することはせず、本稿としたものである。したがって本稿は入手することのできた、ごく限られた文献(主に研究書、論文)に拠っているにすぎない。

② Whitelock, D., p.167. 大沢一雄、一八二頁。邦訳はアルムグレン・B., 一〇二頁に拠る。なお、リンデスファーン修道院で発見された石製レリーフはこの事件の様子を描いたものと考えられている。Brøndsted, J., s. 29—30. Foote, P. & Wilson, D. M., Pl. 1 (a). Haywood, J., P.54.

③ Jones, G., 1968/1984, pp.194-195. Logan, F. D., pp.39-40. Page, R. I., 1995, p.79. Whitelock, D., pp. 775-777. 邦訳はアルムグレン・B., 一〇二頁に拠る。

④ *The Annals of Inisfallen*, pp.304-309, *passim*. Birgit & Sawyer, P., p.53. Brøndsted, J., s.32-35. Crawford, I.A.,

pp.259-269. Durand, F., p.11-12. Hallendorff, C. & Schück, A., pp.18-19, 23-24. Hull, E., pp.370-372. Kendrick, T. D., pp.2-3, n.2. Lund, N., pp.259-269. Sawyer, P.H., 1970, pp.163-207; 1978, pp.23-31. Simpson, J., pp.12-13. Smyth, A. P., pp.101-117. Westerdahl, Ch., pp.44-45. Wilson, D. M., 1970/1980, pp.85-86. フヘンヤナー・R., 六二八頁。

第 II 章

① Clarke, H & Ambrosian, B., p.70. Holmqvist, W., pp.40-41, 55, 60. Jankuhn, F., S. 489. Oxenstierna, E. G., S.49, 116. Simpson, J., p.25. Wilson, D. M., 1970/1976, p.59, III.35. ヘルムグレン・B., 五二一、五四頁。ロト・Y., 三三三頁。シンプソン・J., 一三五頁。口絵十三。

② *The Annals of Inisfallen*, pp.124, 125.

③ Oxenstierna, E. G., S.51. Durand, F., p.23.

④ フヘンヤナー・R., 四七頁。

⑤ Marcus, G. J., 1981, p.42. Oxenstierna, E. G., S.109. 邦訳はアルムグレン・B., 一二六頁に拠る。

⑥ とりわけ『アルスター年代記 (*Annales of Ulster*)』は九一六年コンフェイ (Confeiy) 九一九年クライマスホグ (Climashogue) での激戦とその悲しみを記し、『インイスファレン年代記』は九一七年レヤン・モール (Raithen Mór) での激戦で多数の家畜が殺された、クロウタドリやシグウィの鳴き声やその年には聞かれなかった、と記している。 *The Annals of Inisfallen*, pp.146, 147. Brøndsted, J., s. 71-72. Logon, F. D., p.50.

⑦ *Cogadh Goedhel re Gallaidh The War of the Goedhil with the Gaili*, pp.50-51. 当該史料はその叙述構成、成立年代、歴史的背景、史実との関係などに議論がある。本稿では本文に示された文脈において紹介することとする。もしあたり以下参照。 *The Annals of Inisfallen*, pp.184, 185. Brøndsted, J., s.51. Durand, F., p.5. Hull, E., pp.363-392. Jesch, J., p.108. Joyce, P. W. pp.515-521. Logan, F. D., p.54. Pulsiano, P., p.101. Roesdahl, E., p.224. Sawyer, P. H., 1962/1978, pp.27-28; 1982/1994, pp.21-23. Smyth, A. P., pp.101-117. フェルトナー・R., 四八頁。

⑧ この戦いの背景に存在するアイルランド人、デーン人、ノルウェー人相互の、複雑な歴史的、政治的諸関係の中で、とりわけ後二者間の覇権闘争に重点を置き、必ずしもアイルランド側には負の遺産のみが課されたわけではないという見方が少くない。Hull, E., pp.363-

392. Lewis, A. R., pp.409-410.

しかし筆者は「いじぶ」それら争乱はノルマン人がアイルランドへ侵入し、そこで展開されたのであって、その逆ではないという事実とその視点は見落してはならぬと考へる。

⑨ Whitelock, D., p.166, n. 5. Logan, F. D., pp.38-39. 大沢一雄「一八一頁」。

⑩ Logan, F. D., p.119.

⑪ Logan, F. D., p.119. Jones, G., 1968/1984, p.215. 邦訳はシモンズ・G., 一二二頁を拠る。

⑫ Coupland, S., p.200(n.20).Haywood, J., p.64. Logan, F. D., p.129.

⑬ *The Annals of Fulda*, pp.122-123. 邦訳は筆者によるもの。一部邦文はハーバー・G., 五六一五七頁を借用した。

⑭ Callmer, J., pp.57, 62. Clarke, H & Ambrosian, B., p.115. Franklin, S. & Shepard, J., p.9. Haywood, J., pp.100, 106. Holmgvist, W., pp.52, 54, 67, 127-130. Jankuhn, H., S. 459-460, 491-495. Jansson, S. B. F., p.28. Jones, G., 1968/1984, pp.242-243. Kumlien, K., S. 20. Lewis, A. R., p.149. Roesdahl, E. & Wilson, D. M., pp.74, 293-294(cat.247).

⑮ *Annales Bertiniani*, pp.19-20. Arbman, H., 1961/1970, p.90. Durand, F., p.48. Haywood, J., pp.102-103. Jones, G., 1968/1984, p.249. Kendrick, T. D., pp.147-148, 148 n. 1. Sawyer, P. H., 1962/1978, pp.30, 213-214; 1982/1994, pp.116-117. Shepard, J., 1974, p.11. Stomberg, A. A., pp.96-97. 註⑨参照。

「いじぶ」 Jones, G., 1968/1984, p.249に「We have reliable literary intelligence of the Rus in 839. Under that year the *Annales Bertiniani* report the arrival at the court of the Frankish emperor, Louis the Pious, of Greek ambassadors sent to him by the emperor Theophilus of Byzantium.」云々の記述に従ってシモンズ・G., 一二〇頁では「八三九年のルス人については信頼すべき文献上の情報がある。その年の項目の「いじぶ」フランス帝国皇帝ルイ一世の宮廷にユサントンの皇帝ネオフォラスが派遣したギリシヤ使節団の到着が報告されている。」云々の「the *Annales Bertiniani*」云々の肝心の箇所が省略されている。同様な例は回覧記事にも少なからぬ。たとえば「The most delicate and at times contradictory shades of meaning have been extracted by scholars from the *gentem suam Rhos* and *gentis Sueonum* of this annal」(p.250) に従って「最もクリケーエド時にさす置いた意味のいじぶの年代記から学者たちは「いじぶ」(一二〇頁)「Our next informant as to the ways of the Rus is no less a person than the emperor Constantine Porphyrogenitus in his work *De Administrando Imperio*, written about 950.」(p.256) に従って「ルス人の生き方についての次なる史料提供者は、皇帝コンスタンチ

ン・ポルフィロジエニタスと九五〇年頃に書かれた彼の作品以外にはない。」(二六七頁)とある。つまり原典のイタリックス部分は、翻訳の底本となった一九七三年版との異同の指摘もなく、省略されている。しかも p.256 に対しては不正確な邦訳となっている。

- ⑮ Arbman, H., 1961/1970, pp.90-94, pl. 40, 41. Clarke, H. & Ambrosian, B., p.120. Roesdahl, E. & Wilson, D. M., pp. 82-83, 150 fig.7, 197 fig.2, 298 cat.268, 300 cat.274. Wilson, D. M., 1970/1980, pl.70. Cf., Raudonikas, W. J., S.7-27, 132-141.

- ⑯ Arbman, H., 1961/1970, pp.91-92. Jansson, S. B. F., p.26. Jones, G., 1968/1984, p.251. Roesdahl, E. & Wilson, D. M., pp.163 fig. 2, 301 cat.278. なお、しばしば誤訳 Arbman, Jansson & Wilson & Jones, Roesdahl & Wilson をばやばの誤で、"a bow", "a piece of wood, apparently from a bow", "a stick" とあるのを校訂して ショーンキ・G. らに「明らかなに船首飾の木の丸なる一片の木」(二二六―二頁)とある。筆者は未確認である。

- ⑰ 『ロシア原初年代記』 十九頁。
- ⑱ Gjerset, K., p.65 n. 1. Kendrick, T. D., pp.145-146, n.4. Noonan, T. S., 1991, p.204. Nordstrom, B. J., p.420. Oxenstierna, E. G., S.72, 74, 75. Pulsiano, P., pp.555-556. Roesdahl, E. & Wilson, D. M., p.76. Sawyer, P. H., 1962/1978, pp. 46-47. Stang, H., pp.63-70. Wilson, D. M., 1970/1980, p.86. トナローナン・V. V., 一一一―一四一頁。ニャロナト・N. A. 則、二四九―二五〇頁。

- ⑳ Arbman, H., 1961/1970, p.100, fig.19. Brøndsted, J., s.256-257. Clarke, H. & Ambrosian, B., pp.117, 122-124. Durand, F., p.49-50. Jesch, J., p.36. Klindt-Jensen, O., pp.113-114. Roesdahl, E. & Wilson, D. M., pp.20 fig.4, 77-78 fig.4・5, 306-307 cat. 300-304. トナローナン・B., 一八―三頁。Cf., Franklin, S. & Shepard, J., pp.100-102, 105-106, 127-128, 140-141. Sawyer, P. H., 1962/1978, pp.62-63. Wilson, D. M., 1962-1965, p.107. 次註㉑参照。

- ㉑ Arbman, H., 1961/1970, pp.100-101, Brøndsted, J., s.257. 本来ならばスウェーデン的要素の残存とスラヴ化の相互関係について、詳細な検討を必要とし、むしろ最近ではこのような断定は控えなければならぬようである。しかし本稿ではとりあえず従来主張をたもつた見解に従って、この問題には触れなす。Cf., Franklin, S. & Shepard, J., pp.121-125. Nordstrom, B. J., pp.419-421. 本章註㉒、㉓参照。

- ㉒ 『ロシア原初年代記』 三〇―三二頁。

- ㉓ 『ロシア原初年代記』 三三―四〇、五一―五九頁。田錐印章 (corn-seal) の分析から双方の歴史的背景を検証するものとして、

Shepard, J., 1986, pp.252-274.

なお、最近 Stein-Wilkeshuis, M. は、この条約中の傷害、殺人事件に関する規定の中に、ノルマンの影響を論証することにより、従来から論争の絶えないう国家成立に関するスラヴ・ロシア起源説を否定している。Stein-Wilkeshuis, M., pp.1-16. 本章註⑭、⑲参照。

- ⑳ Jones, G., 1968/1984, pp.256-258. Martin, J., pp.17-19. Oxenstierna, E. G., S.79-81. Page, R. I., 1995, pp.93-97. Simpson, J., pp.128-131. アルタグノン・B., 二八頁。
- ㉑ 『ロシア原初年代記』、八四一八五頁。
- ㉒ Brøndsted, J., s.224-229. Simpson, J., pp.131-133.
- ㉓ Arbman, H., 1937, S.17. Pulsiano, P., p.43. Vide, Jankuhn, H., S.484-485.
- ㉔ Jones, G., 1968/1984, pp.173-174. Logan, F. D., p.22(26). Roesdahl, E., p.125. Sawyer, P. H., 1962/1978, pp.185, 197-198, 215;1985, p.168. ナウキ・A. ヌー、八九頁。 Cf., Sawyer, P. H., 1982/1994, pp.124ff, 130.
- 双方の地域の相互関係を示すものとして、たとえばビルカ出土の上記の品々は当該地域から齎されたものである。「銀製飾り留め金」: Arbman, H., 1940, Taf. 95: 4; 1943, S.310-311. 「ロケニェ」: Arbman, H., 1940, Taf. 167: 1; 1943, S.132-133. 『北大』、三二頁。プル川河口に近いう黒海の小島からルーン碑文が発見された。注目すべきはこの小島の名称 “Berkowetz (the Birken Island)” であり、北欧各地にみる商業センターたる “Bjarkey (ユルカ島)” と密接な関係があったと考えられる。Bugge, A., p.20 n.1. Gjerset, K., pp.66-67. Cf., Clarke, H. & Ambrosian, B., pp.75, 120, 161, 202. Noonan, T. S., 1994, pp.219-220.
- ㉕ 上記に至った歴史の背景にはキエフ公国とビザンツ帝国をめぐる複雑な政治的経緯があるものの、本稿ではその点には触れない。Shepard, J., 1974, pp.10-33.
- ㉖ Brøndsted, J., s.176(100). Durand, F., p.52-53. Jansson, S. B. F., pp.40-46. Jesch, J., pp.61, 66. Kendrick, T. D., p.163. Page, R. I., 1987/1994, p.49; 1995, p.(88) 89 (90). Pulsiano, P., pp.547 (fig.153), 550, 558, 740. Roesdahl, E. & Wilson, D. M., p.165 fig.4. 邦訳文芸春秋社刊、F., 六一一六三頁も利用した。Logan, F. D., p.202. Sawyer, P. H., 1962/1978, pp.43-44; 1982/1994, p.31 fig.3,32.
- イングヴァル遠征を主題とする議論は下記の文献で詳細に論じられているものの、本稿ではこの問題自体は割愛せざるをえない。Larsson, M. G., pp.98-108. Pálsson, H. & Edwards, P., pp.1-43(44-68). Shepard, J., 1984-1985, pp.222-292.

- ③① Jones, G., 1968/1984, pp.269-270. Nansen, F., vol. I, pp.162-163. 邦訳文はシューンズ・G., 一八〇頁に拠る。
- ③② Brøndsted, J., s. 54. 邦訳文はフロンステミス・J., 七八頁に拠る。グリム・カンバン (Grimr Kampan) の来島はおよそ八二五年頃と考えられる (Nordstrom, B. J., p.238)。
- ③③ 但し、ハラルド美髪王の王政とノルウェーからの脱出、とりわけアイスランドへの移住を直接的な因果関係として一元的に解すことはできない。Pulsiano, P., p.184. Sawyer, P. H., 1970, p.166; 1982/1994, pp.13-14, 57-58.
- ③④ ここでとりわけアイスランド史の立場から留意すべきは、第一にこれら諸島への移住は、とりわけフェロー諸島へのそれはその後の「大洋を股にかけた活動の嚆矢 (a prelude to the far-flung oceanic expansion)」(Marcus, G. J., 1981, p.45; 1956, p.57.) であつた。しかも第二に、これら諸島からアイスランドへ移住したノルマン人は、西暦一〇〇〇年以前において、すでにキリスト教徒であり、あるいはその知識を持っていたことも少なくないという点である。換言すれば、ノルマン人 (ヴァイキング) はアイスランドへ移住するその前史において、キリスト教徒でもありえたその進出先住民とは必ずしも唯一敵対的な関係にあつたわけではなく、むしろ相互に影響を与え合つた関係にあつたのである。但し前註⑧参照。Andersen, P. S., pp.136-137. Blindheim, C., pp.175-176. Byock, J., p.138. Chesnutt, M., pp.122-134. Gjerset, K., pp.190-191. Goudie, G., pp.289-318. Wilson, D. M., 1970-1973, pp.1-2, 17-18. Cf., Fellows-Jensen, G., pp.253-268.
- ③⑤ Nansen, F., vol. I, p.66. ユリヤヌスの著書は残っており、ポリビウス (Polybius: 紀元前一〇〇〜一一八年頃) を介して知るのみである。引用文はストラボ (Strabo: 紀元前六三年〜紀元二五年頃) の言葉によるものである。なお、ユリヤヌス、その著書、テューム等については Nansen, F., vol. I, pp.43-73. Jones, G., 1968/1984, pp.20-21.
- ③⑥ 但し、当時これを「アイスランド」に限定して認識してゐたかどうかは必ずしも明確でない。Cf., Gjerset, K., pp.23-25. なお、アイスランド東南海岸 (Bragdhavellir および Hvalnes 近郊) で発見された三世紀末の、三枚の貨幣は、この頃のブリテン島との「頻繁な通交 (colossal activity)」を示すものと解することは可能である。しかし、他方当該貨幣を贗物とする説もある。Jones, G., 1964/1986, p.31. Marcus, G. J., 1981, pp.24-25.
- ③⑦ Nansen, F., vol. I, p.141. 邦訳文はヘルトナー・R., 四十二頁に拠る。
- ③⑧ Jones, G., 1964/1986, pp.34-35. Logan, F. D., pp.61-62. Nansen, F., vol. I, pp.164-165. 邦訳文はマルマグソン・B., 一四〇頁に拠る。Cf., Morrison, S. E., pp.26-27. Marcus, G. J., 1981, pp.27-28, 179-180(n. 18) & マグヌッソン・E., p.350.

テューレの夏至と冬至についてはポンポニウス・メラ (Pomponius Mela) による『地誌 (de Chorographia)』(紀元四三年頃) において描かれている (Nansen, F., vol. I, pp. 91-92)。しかしメラは勿論のこと、ポリビウス以降ギリシヤ、ローマの著名人の知識はピュテアスの記述がその淵源であったと解せられている。

③⑨ Magistri Adam Bremensis, *Gesta Hammaburgensis Ecclesiae Pontificum*, pp. 276-277. 邦訳文はアルムグレン・B., 八七頁に拠る。ビョルンギー (A. A. Björnbo) が試みた、アダム・ブレンメンシスの地理的認識について、Nansen, F., vol. I, p. 186. 本稿第三章【B】(a)参照。

④⑩ Logan, F. D., p. 63.

④⑪ 『サガ選集』、四頁。なお、次の記述が続いている。

「当時のアイスランドは山と海岸との間は森でおおわれていた。当時この地には、ノルウェー人らがパパと呼んでいたキリスト教徒が住んでいた。しかし、かれらは異教徒とともに居住するつもりがなかったため、やがてそこを去って行った。」(同所)すでに居住していた「パパ」がそもそもこの島に移動して来た理由は、宗教的動機に因るものと思われるものの、その年代はわからない。後註④②。

④⑫ Logan, F. D., p. 65. アイスランドを発見し、移住した最初の人物がそれぞれ誰であったかは明確でない。一一八〇—一一九〇年頃(但し実際はその後、十三世紀の頃か)に書かれた『ノルウェー史 (Historia Norvegiae)』によれば、次のように記述されている。

「次に(その)西方に、イタリア人が『ウルティマ・ティレ (Ultima Thule)』と呼んでいる大きな島がある。今では多くの人々が住んでいるものの、以前は荒廢地で、ハラルド美髪王の時代まで人に知られていなかった。それから、まずその端緒はガルダール、次にもう一人(? フロキー筆者)によるものとして発見され、波をかき分け、ついに見つけ出されたこの島へ、あるノルマン人、つまりインゴルフとヒョルレイフが、妻と子供を伴って、殺人の罪のために故国からそちらへ逃れ来て、その島を復興した。(Nansen, F., vol. I, p. 255)

同趣旨の記述がハラルド美髪王治世の九年、一〇年目の出来事として、チヨドリク (Tjodrik) による『ノルウェー国古代史 (Historia de Antiquitate regum Norvegiensium)』(一一八〇年頃)に記されている (Nansen, F., vol. I, pp. 254-255)。前註④⑩。

ちなみに、アイスランドへの入植年代は、上記の記述史料および従来の学説によれば九世紀末頃とされているものの、考古学的調査〔厳密にはウェストマン島 (Westman Islands)〕によれば十世紀頃に遡る。但し、批判もあろう。Hermanns-Auðardóttir, M., pp. 1-33.

④⑬ Magistri Adam Bremensis, *Gesta Hammaburgensis Ecclesiae Pontificum*, p. 273.

- ④④ ファーバー・G., 一〇七一—一〇八頁
- ④⑤ Hermansson, H., 1930/1966, s. 51-52, 64; 1944/1966, s. 66. 邦訳文は『サガ選集』九頁に拠る。島名は住民の皮膚の色(青“salu cerule”)に由来(Magistri Adam Bremensis, *Gesta Hammaburgensis Ecclesiae Pontificum*, p. 274)と云ふに於て、フレメンシスの説明は誤解である。
- ④⑥ Hermansson, H., 1944/1966, s. 13-14. *The Vinland Saga. The Norse Discovery of America*, pp. 85-86. 邦訳文は『赤毛の英雄記 古代北欧サガ集』二〇—二二頁に拠る。キリスト教化の過程については多くの議論があるものの、本稿では深入りしない。なお、この引用箇所は本稿の課題である「葡萄」の地、つまり「ヴァンランズ」発見のジョンズを語っている。
- ④⑦ 研究者に於て必ずしもその人数が一致しているわけではない。Ingstad, A. S., 1977/1985, p. 11. Seaver, K. A., p. 43.
- ④⑧ *The King's Mirror (Speculum Regale Konungs Skuggsjá)*, p. 144. *Der Königspiegel*, S. 86.
- ④⑨ Ingstad, H., 1985, p. 356. Nansen, F., vol. II, pp. 100-101. Seaver, K. A., p. 86.
- ④⑩ Gjerset, K., p. 204. Ingstad, H., 1985, pp. 356-358. Jones, G., 1982, pp. 11-12. Nansen, F., vol. II, pp. 101-102. Seaver, K. A., pp. 86-87.
- ④⑪ “skrälle” 及び “skrangligt ábake, svag el. bräcklig person” (Hellquist, E., s. 957) (「無格好で弱々しい人」) ‘ネイティヤ・アメリカン(アメリカ・インディアン) あるいはセレストヤン(ヒスキキヤ) あるいはマグヌス’ Magnusson, M. & Pálsson, H., p. 61, n. 1. Morison, S. E., p. 53. 本稿第三章【B】(註②) 本文(A)対応部分。
- ④⑫ Ingstad, H., 1985, pp. 368, 490.
- ④⑬ Ingstad, H., 1985, p. 362. Nansen, F., vol. II, p. 108. Seaver, K. A., p. 104.
- ④⑭ Seaver, K. A., pp. 112, 143, 145. 註 Morison, S. E. は “the last bishop of Gardar” の死(1年を)一三三七年と云ふ(Morison, S. E., p. 60)° Cf., Marcus, G. J., 1981, pp. 156-157. Nansen, F., vol. II, p. 106.
- ④⑮ この部分については、前述のイヴァルと次に言及するニコラス五世の報告などに拠れば、キリンンに対するマーカスの批判が正当と思ふべき。Morison, S. E., p. 60. Marcus, G. J., 1981, pp. 155, 205 n. 2(*European Discovery*, p. 36 註 p. 60 註)
- ④⑯ Marcus, G. J., 1981, pp. 156, 162. Mc Ghee, R., 1984, p. 11. Morison, S. E., p. 60 (cf. 68). Seaver, K. A., pp. 174-176. Vide, 『トランスパシフィック』(Icelandic Annals) 一三三七年の条 (Gjerset, K., p. 202. McGhee, R., 1984, p. 11) Cf., Gjerset, K., p. 203-204. Nansen, F., vol. II, pp. 113ff, 120.

- ⑮ Gjerset, K., p.202. Logan, F. D., p.79. Marcus, G. J., 1981, p.156. Nansen, F., vol. II, p.121.
- ⑯ Haywood, J., p.96. Marcus, G. J., 1981, pp.157, 159, 160, 163. Seaver, K. A., pp.307-308. Wahlgren, E., 1986, p.174. 第三章註⑰⑱。ちなみに一五八五年デーヴィス (John Davis) はグリーンランドに到着したと見え、エスキモー (イヌイット) 以外白人は見当らなかつたのでも、自身がその地の発見者であると思つた。Gjerset, K., p.204。
- ⑰ Dansgaard, W., et al., p.27. Ingstad, H., 1965, pp.365-370. Jones, G., 1968/1984, pp.310-311. Marcus, G. J., 1981, pp.159-163. Mathiassen, T., pp.(195)200-203. Morrison, S. E., pp.67-68. Roesdahl, E. & Wilson, D. M., p.61. Wahlgren, E., 1986, pp.172-177. Porsteinsson, B., pp.176-181.

第三章

- ① Ingstad, H., 1985, p.243. Mowat, F., pp.60-63.
- ② Hermannsson, H., 1944/1966, s.50-51. *The Vinland Saga The Norse Discovery of America*, pp.55-58. 『サガ選集』一七〇—一七九頁。
- ③ 以下【A】記述史料の年代は概年とせよ。
- ④ Magistri Adam Bremensis, *Gesta Hammaburgensis Ecclesiae Pontificum*, p.275. Cf., Hallencreutz, C. F., p.18.
- ⑤ Hermannsson, H., 1944/1966, s.66-67. Morrison, S. E., p.27.
- ⑥ Hermannsson, H., 1930/1966, s.51, 52, 64, 83. Hermannsson, H., 1944/1966, s.66. 『サガ選集』九頁。
- ⑦ Hood, J. C. F., p.38. 史料中の“Jón”とせ“Jón Ögmundarson”と思はせ。一一〇一年から一一二二年まで司教職にあり、一九八八年に聖者に列せられた。当該史料は十二世紀の一〇年代あるいは一一〇年代に書かれたものでも、十一世紀前半から一七六六年までの出来事や記述については。Byock, J. L., p.19. Pulsiano, P., pp.107, 307 (315,319).
- ⑧ Snorri Sturluson, *Heimskringla*, p.84.
- ⑨ Hermannsson, H., 1944/1966, s.68. 邦訳は谷口幸男、九一—一〇二頁に拠る。Cf., Morrison, S. E., p.27. 『アイスランド サガ』五〇—七頁。
- ⑩ Hermannsson, H., 1944/1966, s.67-68. 邦訳は谷口幸男、九頁に拠る。

- ① Boyer, R., p. 788, 1761. 邦訳は『アイスランド語 雑言』一七二頁を拠る。
- ② “leiradi” 及 “fór at leita” の語彙の相違に付して Foote, P. G., pp. 78-79. Marcus, G. J., 1981, pp. 77, 78. Nansen, F., vol. II, pp. 29-30. Seaver, K. A., p. 33.
- ③ “smaller in size than the small Icelandic boats” (Jones, G., 1982, p. 10.) “smaller in size than the small vessels that trade to Iceland” (Ingstad, H., 1985, p. 358. Nansen, F., vol. II, p. 36) “smaller (in size) than those (ones) which ply to Iceland” (Morison, S. E., p. 59. Porsteinsson, B., p. 182)
- ④ “it came to Outer Straumfjord” (Ingstad, H., 1985, p. 358. Nansen, F., vol. II, p. 36) “She came (It sailed) into the outer Straumfjord” (Jones, G., 1982, p. 10. Porsteinsson, B., p. 182)
- ⑤ Hermannsson, H., 1930/1966, s. 83; 1936/1966, s. 76-77; 1944/1966, s. 69. Davies, A., pp. 260-261. Foote, P. G., pp. 73-89 (261). Larsen, K., p. 63.
- ⑥ Hermannsson, H., 1944/1966, s. 68. Ingstad, H., 1985, p. 344. Jones, G., 1982, pp. 9-10. 邦訳は谷口幸男『十頁を拠る』所収史料の信憑性⁹ 記述者の特定など¹⁰の議論は、このもとでも Hermannsson, H., 1936/1966, pp. 2-3. Ingstad, H., 1985, pp. 343-351.
- ⑦ 他に上記参照。Mowat, F., pp. 334-335. ユニオン(Björn Jónsson)による『グリーンランド』(古)年代記¹¹の記述は、次註¹² 第二章註¹³ Mowat, F., p. 394.
- ⑧ Seaver, A., p. 34. Jones, G., 1964/1986, p. 20. なお前記〔本稿第二章《グリーンランド》〕ユニオン(Björn Jónsson)は、ロシアのアイスランドの史料(おもに十一世紀)に基づいて自身編纂した『グリーンランド』(古)年代記¹⁴の中の“Gripla” (年代不明)で次のように転写している。
- 「フルズストランド (Furðustrandir) は、人の知る限り (人の) 住むところのどこか、ひどく霜の降りる土地の名前である。その南にはスクレーリントの土地 (Skrelingjaland) と呼ばれるヘルランド (Helluland) がある。そこから近距離のところに恵みの谷 (Winland the Good) がある、それはアフリカ (Africa) から突き出していると考えられる。」(Jones, G., 1964/1986, pp. 21-22. Mowat, F., pp. 335 (-343). Nansen, F., vol. II, p. 35)
- このような認識は、十一世紀中頃のニクラン (Abbot Nikulás Bergsson) が表明している (Nansen, F., vol. II, p. 1)¹⁵。したがって大西洋は「内海」と解されることだ。Porsteinsson, B., pp. 174, 187-189.
- ⑨ ユニオン (Axel Anthon Björnbo) の “Cartographia Groenlandica”, Meddelelser om Grønland, 48, 1912. に発表し

た地図について下記の文献にみることもできる。Jones, G., 1968/1984, p.158. Ingstad, H., 1985, pp.44-45. Seaver, K. A., pp.34-35 fig. 8, 164, 166 fig. 19, 167, 336 n. 74.

なお、当該地図と「ヴァンランド・マップ」(後述⑥)の齟齬を根拠として、こちらに言えば後者はその後の地図の作成に継承されていない、換言すれば前者が依然として踏襲されているという状況に鑑みて、一方では後者の偽作が主張され、他方では前者にとらわれない後者の独自性、先進性が説かれ、その信憑性が主張される。この議論は、当該年代にあって知識の連続的継承性を承認し、これを前提とする事ができるのか否か、という歴史研究の本質的問題に関わっている。たとえば、“there is no trace of this (「ヴァンランド・マップ」のグリーンランド筆者) outline in later maps, and it is unlikely that the Norsemen could have voyaged round Greenland at that date.” (Crone, G. R., 1966, 5, P.361) なども『Atlas de Santarem, pl.No.50 (一四五九年作成)』では大西洋を挟んでアイスランドの対局にはアジア大陸が描かれている。本章註⑭、⑮、本稿第二章註⑯、第四章註⑰参照。

⑳ Ingstad, H., 1985, p.325 fig. 53. Jones, G., 1968/1984, pp.305-306. Morrison, S. E., pp.72, 73. Mowat, F., pp.364-371.

㉑ 一五七〇年頃生れ、ロピンハーゲンで勉学を積み、スカルホルトの学校長などを歴任し、一五九五年に死亡した。

㉒ Ingstad, H., 1985, p.324.

㉓ Ingstad, H., 1985, pp.324, 334. Munn, W. A., pp.19-20. Porsteinsson, B., p.190.

㉔ Ingstad, H., 1985, pp.320-321 fig. 54, 323-337. ノーヤン・H. P. はロピンハーゲン、ドイツなどで研究を積み、一六一五年ゼーランズ (Zealand) の司教に任命された。彼は多くの書物を著し、とりわけアイスランド史に興味があった。

㉕ Ingstad, H., 1985, pp.339-340.

㉖ 「ヤンランズ・マップ」の写真印刷を Skelton, R. A., Marston, T. E. & Painter, G. D., pp.18-19間に挿入、及び p.1.Ⅷ。当該記述文は同書 p.1.Ⅳ' 及び p.140' 邦訳文の後半部分はシンペン・J., 五六頁に拠る。本章【A】(i)参照。

㉗ 一九九五年刊行の研究書とは上記(註⑳)言及のそれである (pp.IX, X)。本稿ではこの問題自体には介入せず、さしあたり下記の文献をホムビニウ&ス Cahill, T. A., et al., pp.829-833. Crone, G. R., 1965, 1966. 2, pp.75-78; 1966, 3, pp.75-80. Davies, A., pp.259-263-265. Harvey, P. D. A., pp.60-61. Marcus, G. J., 1981, pp.76-77. Morrison, S. E., pp.69-72. Pulisiano, P., pp.703-704. Quinn, D. B., pp.63-72. Wallis, H., et al., pp.183-214. 毎日新聞。後註⑳。

㉘ Ingstad, H., 1985, p.403. Munn, W. A., p.31. Wahlgren, E., 1986, p.74.

㉙ 『Historia Norvegiæ (ノルウェー史)』(十三世紀) はマダム・ブレンミンスを多く利用しているにもかかわらず、当該碑文に言及さ

れている『サントリランド』に触れているのは「全く不思議である (strangely enough)」(Nansen, F., vol. II, p.29) としての議論はこれを全否定するといはじかない。しかし情報の交換・伝達が極めて困難な当時において、このような議論はともなも一律に提起するのはか疑問である。Ingstad, H., 1985, p.404. Kendrick, T. D., p.387 n.1. 本書註⑤ 【B】②参照。

したがって情報の伝達に断絶があるというわけは、理論的には数世紀後の「再発見」をめざして Colker, M. L., pp.712-726. Cf., Jones, G., 1964/1986, pp.18-20, n.9-11.

② Ingstad, H., 1985, p.432. Kendrick, T. D., pp.383-384 n.1. Logan, F. D., pp.95-96. Morrison, S. E., pp.38,73-75. Wahlgren, E., 1986, pp.105-107. Wallace, B. L., 1982, pp.54-57; 1991, pp.207-208. Cf., Pohl, F. J., pp.316-317.

③ Pohl, F. J., pp.187-207.

④ Jansson, S. B. F., p.29. Logan, F. D., p.95. Wallace, B. L., 1982, pp.57-58. Wahlgren, E. センヤン・ヒンクマンの上陸地点や町並みなどの想像図による (Wahlgren, E., 1986, p.163)。

⑤ Logan, F. D., p.97, pp.96-97 図解への註。Wallace, B. L., 1982, p.58 [Guralnick, E., fig. 17] Wahlgren, E., 1986, pp.98,102. 註⑥。

⑥ Henry, T. R., p.343. Wahlgren, E., 1986, p.101.

⑦ Wahlgren, E., 1986, pp.100-101.

⑧ Haugen, S. N., pp.321-356.

⑨ Kendrick, T. D., pp.382-383 n.1. Logan, F. D., pp.97-98. Morrison, S. E., pp.75-77. Page, R. I., 1987/1994, p.61. Pulsiano, P., p.352. Wahlgren, E., 1986, pp.100-105. Wallace, B. L., 1982, pp.58-61; 1991, pp.208-209. ハーザー・G., 1111-1111 頁。ペナルター・R., 八九一九三頁。

⑩ Morrison, S. E., p.77. Wallace, B. L., 1982, p.64.

⑪ Guralnick, E., fig. 18, 19.

⑫ Logan, F. D., p.98. Morrison, S. E., p.77. Wallace, B. L., 1982, pp.64-66; 1991, pp.209-210.

⑬ Wallace, B. L., 1982, p.66.

⑭ Kendrick, T. D., pp.382-383 n.1. Logan, F. D., p.96. Wahlgren, E., 1986, p.108.

⑮ Kendrick, T. D., pp.382-383 n.1. Logan, F. D., p.94-95. Morrison, S. E., pp.245-247. Wahlgren, E., 1986, p.108.

- ④④ Logan, F. D., p.95.
- ④⑤ Logan, F. D., pp.96-97. Morison, S. E., pp.77-78. Wahlgren, E., 1986, p.110. Wallace, B. L., 1982, pp.66-67; 1991, p. 210. トハナルナー・R., 九三—九四頁。
- ④⑥ Wahlgren, E., 1986, pp.110-111. Wallace, B. L., 1982, pp.67-68. Cf., Pohl, F. J., pp.208-209, 214-215.
- ④⑦ 本書【A】(三)
- ④⑧ Haywood, J., p.98. Ingstad, H., 1985, pp.432-434. Logan, F. D., pp.104-105. McGhee, R., 1982, pp.42-43; 1984, pp.13-14. Pulsiano, P., p.404. Seaver, K. A., pp.36-37. Wallace, B. L., 1982, pp.68-69.
- ④⑨ Pulsiano, P., p.701. Wahlgren, E., 1986, pp.113-114.
- ④⑩ Haugen, E., 1974, pp.33-64. Page, R. I., 1987/1994, pp.60-61. Pulsiano, P., pp.700-701. Wahlgren, E., 1982, pp.167-185; 1986, pp.115-119. 以下の他は Pohl, F. J. 『サントイキンズがアメリカ合衆国』 ミシシッピ (Mississippi) を通航した証拠として
トランストン石板 (Thruston Tablet) 『オクラホマ・ストーン碑文 (Oklahoma runic inscriptions) を発掘した』 (Pohl, F. J., pp.317-326)。
- ④⑪ Harrington, M. Munn, W. A., p.13.
- ④⑫ 発掘の経緯と遺跡についてせよとあるが Ingstad, A. S., 1977/1985 及び Ingstad, H., 1964, pp.726-734 にはない。これは逆に、アメリカ合衆国マサチューセッツ州などの地域にも「ト」をめぐって見做せられるノルマン人の住居跡を “Vinland” として確認するため、アイスランドの住居跡等が別人による調査をめぐらさる。 Erlingsson, T.
- ④⑬ Ingstad, A. S., 1977/1985, pp.164 (fig. 80), 168 (fig. 83), 171 (fig. 85); 1982, pp.32-33. Ingstad, H., 1985, pp.58, 488.
- ④⑭ Birgit & Sawyer, P., p.44 fig. 2・2. Foote, P. & Wilson, D. M., pp.154-156. Ingstad, A. S., 1977/1985, p.198 fig. 97. Roesdahl, E. & Wilson, D. M., p.55 fig. 3. Sawyer, P. H., 1982/1994, p.57 fig. 8. ノト・Y., 101—104頁。
- ④⑮ Foote, P. & Wilson, D. M., p.168. Ingstad, A. S., 1977/1985, pp.223-226. Mathiassen, T., p.201. クトヘン 冊子の発掘: Roesdahl, E. & Wilson, D. M., p.384(590e).
- ④⑯ Haywood, J., pp.45, 98. Jesch, J., pp.88, 203-204. Wallace, B. L., 1991, p.215.
- ④⑰ Ingstad, A. S., 1977/1985, p.195 fig. 95.
- ④⑱ Simpson, J., p.64. Wahlgren, E., 1986, p.128.

- ⑮ Ingstad, A. S., 1977/1985, pp.121-139.
- ⑯ Ingstad, A. S., 1977/1985, pp.47, 363-377. Ingstad, H., 1964, pp.711-712, 731.
- ⑰ 北極圏の歴史と記号の文獻箇所を綜合せよとの。Ingstad, H., 1982, pp.24-30. Ingstad, A. S., 1982, pp.31-37. Logan, F. D., pp.99-105. Morrison, S. E., pp.38, 47-51, 68-69. Pulsiano, P., pp.378-379. Seaver, K. A., pp.24,32. Simpson, J., pp.52-53. Wahlgren, E., 1986, pp.121-133(137). ハーザー・G., 111頁-1113頁。トーマスター・R., 九三-九十四。

終 語

- ① “Notwithstanding...any report of Norse artefacts, it could be confidently asserted……, that no antiquities had ever been found in American which could be positively attributed to the presence of either Vikings or other Europeans in the medieval era.” (Marcus, G. J., 1981, p.76). Hermannsson, H., 1936/1966, pp.48-50.
- ② 本稿第三章【A】㉔
- ③ Ingstad, H., 1964, pp.712; 717; 1982, p.26.; 1985, pp.307-311. Lönnroth, E., pp.46-47. Nansen, F., vol. I, pp.382-384. Odell, N. E. は “vin” 由来の「牧草畑」を解してノルウェーの遠征地はグリーンズ・ホ・メンの東部、トリンニハーバー湾 (Trinity Bay) の東、グ・ホ・グ・グ・グ (Bay de Verde) の基部に於ける見解である (Mowat, F., pp.117-131, 418-438)。
- ④ Wahlgren, E., 1986, pp.139-146. 但し “vin” の語源を知る、対象地域に關して詳細な検討は、Mowat, F. の論文に參照。Arbman, H., 1961/1970, pp.113-114. Boyesen, H. H., p.180. Gjerset, K., pp.214-215, 222-223. Haugen, E., 1981, pp.3-8. Hermannsson, H., 1936/1966, pp.61-75. Kendrick, T. D., p.377. Magnusson, M. & Pálsson, H., p.58 n.1. Nansen, F., vol. I, p.367 n.1. Pohl, F. J., pp.211-213. グリーンランドを発掘した無煙炭の出所を根拠として、場合ロルフ・カールマンの遠征地を北緯地帯 (ローゼンランド) Rhode Island) に於ける見解である (Gunnes, E., s.141)。但し “vinlands” の語彙は、自本や他の全く異なる地域の類似地名を求める解釈 (Nansen, F., vol. II, pp.31-35) を本稿では採る。
- ⑤ Derry, T. K., p.395. Ingstad, A. S., 1977/1985, pp.25, 313-316, 345-348. Mowat, F., pp.126-129. Munn, W. A., pp.15-17. Wahlgren, E., 1986, pp.129-131, 138, 146, 162-164.
- ⑥ Wahlgren, E., 1986, p.140.

- ⑦ Wahlgren, E., 1986. pp.139-140.
- ⑧ Wahlgren, E., 1986, p.145.
- ⑨ Dansgaard, W., et. al.. pp.24-28. Harris, R. C., pl. 16. Ingstad, A. S., 1977/1985, pp.348-349. Mowat, F., pp.127, 313-318. Vide, Haywood, J., p.88. McGhee, R., 1984, p.6.
- ⑩ 次の見解の中に入るべきである。"Thus we can perhaps say that L'Anse aux Meadows is not Vinland but that it is in Vinland." (Wallace, B. L., 1991, p.218)
- ⑪ Wahlgren, E., 1986, p.137. 聖地 "The reconstructed Norse houses at L'Anse aux Meadows represent a first-class achievement in modern archaeology, and a major enrichment of our geographical and historical knowledge. A sizeable group of Scandinavians must have spent, not just a single winter, but several years at the site close to a millennium ago." (*ibidem*, p.159)
- 次の見解を回遊証と評するべき。"The all-important fact about Vinland is, however, that it remained a fleeting glimpse, an episode." (Skard, S., p. 4) Jones, G., 1940/1976, p.112.
- ⑫ Roesdahl, E., p.275. 回遊の経路について Haywood, J., p.98. Roesdahl, E. & Wilson, D. M., p.59. Mowat, F., p.457. なお、ランス・オ・メドウで発掘された遺物と同じイベントにまつて発見された「一種のタネ」(a kind of walnut-butternut)は、回遊者の南方、たゞち東部ニューブランズウィック(New Brunswick)から持ち込まれたものである。"This small but important bit of evidence proved for the first time that the Norse who lived at L'Anse aux Meadows had visited areas where wild grapes grew." (Horwood, J., p.43) 以下の見解を承認してこそ、回遊証である。
- ⑬ 第三章註⑧、本註註④、聖地 Nansen, F., vol. I, pp.334, 345-353, 373-374; vol. II, pp.1-24, 42-62. Cf., Lönnroth, E., pp.41-42 (*Navigatio Brendani*).
- さなみに、「ヤンソン」がアメリカの半島の一部であるという記述(第三章【A】(1)【B】(2)註⑧)の根拠として Pohl, F. J. は、カールセフィ(Karlsefni)がメキシコ湾まで航海し、キューバやユカタン(半島)を回遊し、そのように想定したのが、その証拠("evidence")である。Pohl, F. J., pp.149, 158)。第三章註⑧を参照。
- ⑭ たゞち、ヤンソン・トンプソンは、正確なグリーンランドの輪郭は CRone, G. R. にあらず "far-fetched" である。"too accurate to have been produced at that time" と評して Skelton, R. A. は、それなりの時の人々が回遊を何度か訪れ

(“frequented these coasts”) 周遊した体験 (“actual ‘experience’”) に基いての事だ。たゞ主張するの事である。

ちなみに、北緯七十九度附近のヒルスマン島 (Ellesmere Island) の Schledermann, P. の著として発掘された十一世紀頃の北歐人の遺物、とりわけ鉄の製品 (iron chain mail) 等の発見 (“Vikings”) などの類々、この地帯に到達しようとした人々を、これを可能にする。Crone, G. R., 1966, 2, pp. 76-77. Pohl, F. J., pp. 151, 156, 161. Schledermann, P., pp. 575-601. Skelton, R. A., et. al., pp. 183, 189. 類書【中】の ① ② ③ ④ ⑤

⑤ “So clear was the lesson, and so lasting its effect, that a European acquaintance with North America was delayed for a further five hundred years, and the honour of the discovery remained all that while with the Norsemen alone,” (Jones, G., 1964/1986, p. 2)

“Sentiments such as these, aroused by fear of the fighting abilities of the eastern North American natives, must have been largely responsible for preventing the expansion of Europeans into North America for the following 500 years.” (McGhee, R., 1984, p. 23)

＜地理文庫＞

Magistri Adam Bremensis, *Gesta Hammaburgensis Ecclesiae Pontificum*: Schneider, B. (herg), *Scriptores Rerum Germanicarum in Usum Scholarum ex Monumentis Germaniae Historicae Separatim Editi*, 1917.

Anderson, P. S., 1991. “Norse Settlement in the Hebrides: What has happened to the Natives and What happened to the Norse Immigrants?” Wood, I. & Lund, N. (eds).

Andreson, T. & Sandred, K. I. (eds), 1978. *The Vikings. Proceedings of the Symposium of the Faculty of Arts of Uppsala University June 6-9, 1977.*

Annales Bertiniani: Waitz, G. (ed), *Scriptores Rerum Germanicarum in Usum Scholarum ex Monumentis Germaniae Historicae Recusi*, 1883.

The Annals of Fulda: Reuter, T. (trans & anno), 1992.

Annals of Inisfallen: Airt, S. M. (ed. & tarans), 1951.

Arbman, H., 1937. *Schweden und das Karolingische Reich. Studien zu den Handelsverbindungen des 9. Jahrhunderts.*

- Arbman, H., 1940. *Birka I. Die Gräber Tafeln*.
- Arbman, H., 1943. *Birka I. Die Gräber Text*.
- Arbman, H., 1961/1970. *The Vikings*.
- Atlas de Santarem*, 1849: Wallis, H. & Simons, A. H. (expl. & note), 1985.
- Birgit & Sawyer, P., 1993. *Medieval Scandinavia. From Conversion to Reformation, circa 800-1500*.
- Blindheim, C., 1978. "Trade Problems in the Viking Age. Some Reflections on Insular Metalwork Found in Norwegian Grave of the Viking Age", Andersson, T. & Sandred, K. I. (eds).
- Boyer, R. (traduit), 1987. *Sagas islandaises*.
- Boyesen, H. H., 1900. *A History of Norway from the Earliest Times*.
- Brøndsted, J., 1960, *Vikingerne*.
- Bugge, A, 1908-1909. "Seafaring and Shipping during the Viking Ages." *Saga=Book of the Viking Society*, vol. VI.
- Byock, J. L., 1988/1990. *Medieval Iceland Society, Saga, and Power*.
- Cahill, T. A. et al., 1987. "The Vinland Map, Revisited: New Compositional Evidence on its Ink and Parchment", *Analytical Chemistry*, vol.59, no.6.
- Callmer, J., 1994. "Urbanization in Scandinavia and the Baltic Region c. A. D. 700-1100: Trading Places, Centres and Early Urban Sites". *Birka Studies*, vol. III: *The Twelfth Viking Congress*.
- Chesnutt, M., 1968. "An Unsolved Problem in Old Norse-Icelandic Literary History", *Mediaeval Scandinavia*, vol. I.
- Clarke, H. & Ambrosian, B., 1991/1995. *Towns in the Viking Age*.
- Cogadh Gaedhel re Gallaih The War of the Gaedhil with the Gaili*: Todd, J. H. (ed), 1867.
- Colker, M. L., 1979. "America Rediscovered in the Thirteenth Century?", *Speculum*, vol. LV, no.4.
- Coupland, S., 1995. "The Vikings in Francia and Anglo-Saxon England to 911", McKitterick, R. (ed.), *The New Cambridge Medieval History*, vol. II c. 700-c. 900.
- Crawford, I. A., 1981. "War or Peace. Viking Colonisation in the Northern and Western Isles of Scotland reviewed", *Mediaeval Scandinavia Supplements*, vol. II: *Proceedings of the Eighth Viking Congress*.

- Crone, G. R., 1965. "The Vinland Map Questions to be answered", *The Times*, October 14.
- Crone, G. R., 1966. 2. "How Authentic is the 'Vinland Map'?", *Encounter*, vol. XXVI, no. 2.
- Crone, G. R., 1966. 3. "The Vinland Map Cartographically Considered", *The Geographical Journal*, vol. 132, part. 1.
- Crone, G. R., 1966. 5. "Vikings at Sea", *History Today*, vol. XVI, no. 5.
- Dansgaard, W. et al., 1975. "Climatic Changes, Norsemen and Modern Man", *Nature*, vol. 255.
- Davies, A., 1966. "The Vinland Map and the Tartar Relation. A Review", *Geography*, vol. 51, part. 3. no. 232.
- Derry, T. K., 1979. *A History of Scandinavia Norway, Sweden, Denmark, Finland and Iceland*.
- Durand, F., 1965/1977. *Les Vikings*.
- Erlingsson, T., 1899. "Ruins of the Saga-Time in Iceland", *Viking Society Extra Series*, vol. II.
- Fellows-Jensen, G., 1994. "From Scandinavia to the British Isles and Back Again. Linguistic Give-and-take in the Viking Period", *Birka Studies*, vol. III: *The Twelfth Viking Congress*.
- Foote, P. G., 1966-1969. "On the Vinland Legends on the Vinland Map" *Saga=Book of the Viking Society*, vol. XVII.
- Foote, P. & Wilson, D. M., 1970/1980. *The Viking Achievement The Society and Culture of Early Medieval Scandinavia*.
- Franklin, S. & Shepard, J., 1996. *The Emergence of Rus 750-1200*.
- Gjerset, K., 1932/1969. *History of Norwegian People*, vol. I.
- Goudie, G., 1892-1896. "The Norsemen in Shetland", *Saga=Book of the Viking Club*, vol. I.
- Gunnes, E., 1976. *Norges Historie bd. 2 Rikssamling og Kristning ca. 800-1177*.
- Guralnick, E. (ed), 1982. *Vikings in the West*.
- Hagen, S. N., 1950. "The Kensington Runic Inscription", *Speculum*, vol. XXV, no. 3.
- Halldórsson, O., 1981. "The Conversion of Greenland in written Sources", *Mediaeval Scandinavia Supplements*, vol. II: *Proceedings of the Eighth Vikings Congress*.
- Hallencrutz, C. F., 1984. *Adam Bremensis and Sueonia A Fresh Look at Gesta Hammaburgensis Ecclesiae Pontificum*.
- Hallendorf, C. & Schück, A., 1929. *History of Sweden*.
- Harrington, M., 1992. "The Finding of Wineland the Good <Preface>", Munn. W. A.

- Harris, R. C. (ed), 1987. *Historical Atlas of Canada*.
- Harvey, P. D. A., 1991. *Medieval Maps*.
- Haugen, E., 1974. "The Rune Stones of Spirit Pond, Maine", *Visible Language*, vol. VIII, no. 1.
- Haugen, E., 1981. "Was Vinland in Newfoundland?", *Medieval Scandinavia Supplements*, vol. II: *Proceedings of the Eighth Vikings Congress*.
- Haywood, J., 1995. *Historical Atlas of the Vikings*.
- Hellquist, E., 1980. *Svensk Etymologisk Ordbok*, bd. II.
- Henry, T. R., 1948. "Smithonian Institution", *The National Geographic Magazine*, 9.
- Hermanns-Auðardóttir. M., 1991. "Discussion The Early Settlement of Iceland", *Norwegian Archaeological Review*, vol. 24, no. 1.
- Hermannsson, H., 1930/1966. "The Book of The Icelanders", *Islandica*, vol. XX.
- Hermannsson, H., 1936/1966. "The Problem of Wineland", *Islandica*, vol. XXV.
- Hermannsson, H., 1944/1966, "The Vinland Sagas", *Islandica*, vol. XXX.
- Holmqvist, W., 1979. *Swedish Vikings on Helgö and Birka*.
- Hood, J. C. F., 1946/1981. *Icelandic Church Saga*.
- Horwood, J., 1985. *Viking Discovery L'Anse aux Meadows*.
- Hull, E., 1906-1909. "The Gael and the Gall: Notes on the Social Condition of Ireland during the Norse Period", *Saga=Book of the Viking Club*, vol. V.
- Ingstad, A. S., 1977/1985. *The Norse Discovery of America*, vol. I.
- Ingstad, A. S., 1982. "The Norse Settlement of L'Anse aux Meadows, Newfoundland", Guralnick, E. (ed).
- Ingstad, H., 1964. "Vinland Ruins Prove Vikings found the New World" *National Geographic*, vol. 126, no. 5.
- Ingstad, H., 1982, "The Discovery of a Norse Settlement in America" Guralnick, E. (ed).
- Ingstad, H., 1985, *The Norse Discovery of America*, vol. II.
- Jankuhn, H., 1975. "Die frühmittelalterlichen Seehandelsplätze im Nord- und Ostseeraum", Konstanzer Arbeitskreis für

mittelalterliche Geschichte (herg.), *Vorträge und Forschungen*, Bd. IV *Studien zu den Anfängen des europäischen Städtewesens*.

Jansson, S. B. F., 1962. *The Runes of Sweden*.

Jesch, J., 1991. *Women in the Viking Age*.

Jones, G., 1940/1976. "Norsemen in America", Chase, H. W. et al. (eds), *Dictionary of American History*, vol. V.

Jones, G., 1964/1986. *The Norse Atlantic Saga Being the Norse Voyages of Discovery and Settlement to Iceland, Greenland, and North America*.

Jones, G., 1968/1984. *A History of the Vikings*.

Jones, G., 1982. "Historical Evidence for Viking Voyages to the New World", Guralnick, E. (ed).

Joyce, P. W., 1913/1968. *A Social History of Ancient Ireland*, vol. I.

Kendrick, T. D., 1930/1968. *A History of the Vikings*.

King's Mirror (Speculum Regale-Konungs Skuggsjá) : Larson, L. M. (trans), 1917.

Klindt-Jensen, O., 1975. *A History of Scandinavian Archaeology*.

Der Königspiegel Konungsskuggsjá : Meissner, R. (überstzt), 1944.

Kumlien, K., 1970. "Der Historiker und das Birkaproblem", *Antikvariskt arkiv*, 38. *Early Medieval Studies I*.

Larsen, K., 1948/1974. *A History of Norway*.

Larsson, M. G., 1987. "Yngvarr's Expedition and the Georgian Chronicle", *Saga=Book*, vol. XII

Lewis, A. R., 1958/1978. *The Northern Seas Shipping and Commerce in Northern Europe A. D. 300-1100*.

Lindquist, S-O. (ed), 1985. *Society and Trade in the Baltic during the Viking Age*.

Logan, F. D., 1983. *The Vikings in History*.

Lönroth, E., 1996. "The Vinland Problem", *Scandinavian History Review*, vol.21, no.1.

Lund, N., 1981. "The Settlers: Where do we get them from-and do we need them?". *Mediaeval Scandinavia Supplements*, vol. II : *Proceedings of the Eighth Vikings Congress*.

Magnússon, E., 1897-1900. "The Conversion of Iceland to Christianity, A. D. 1000", *Saga=Book of the Viking Club*,

vol. II.

- Magnússon, M. & Pálsson, H. (trans), 1965/1987. *The Vinland Saga. Norse Discovery of America.*
- Marcus, G. J., 1956. "The Norse Emigration to the Faeroe Islands", *The English Historical Review*, vol. LXXI.
- Marcus, G. J., 1981. *The Conquest of the North Atlantic.*
- Martin, J., 1995. *Medieval Russia 980-1584.*
- Mathiassen, T., 1935. "Archaeology in Greenland", *Antiquity*, vol. IX.
- McGhee, R., 1982. "Norsemen and Eskimos in Arctic Canada". Guralnick, E. (ed).
- McGhee, R., 1984. "Contact between Native North Americans and the Medieval Norse: A Review of the Evidence", *American Antiquity*, vol. 49, no. 1.
- Morison, S. E., 1971. *The European Discovery of America The Northern Voyages A. D. 500-1600.*
- Mowat, F., 1965. *West Viking The Ancient Norse in Greenland and North America.*
- Munn, W. A., 1914/1946. *Wineland Voyages Location of Helluland~Markland and Vinland.*
- Nansen, F., 1911/1969. *In the Northern Mists. Arctic Exploration in Early Times* (trans. by Charter, A. G.), vols. I, II.
- Noonan, T. S., 1991. "The Vikings and Russia: Some New Directions and Approaches to an Old Problem", Samson, R. (ed).
- Noonan, T. S., 1994. "The Vikings in the East: Coins and Commerce", *Birka Studies*, vol. III: *The Twelfth Viking Congress.*
- Nordstrom, B. J. (ed), 1986. *Dictionary of Scandinavian History.*
- Odell, N. E., 1965. "The Vinland Map", *The Times*, October 20.
- Oxenstierna, E. G., 1959/1979. *Die Wikinger.*
- Page, R. I., 1987/1994. *Runes.*
- Page, R. I., 1995. *Chronicles of the Vikings.*
- Pálsson, H. & Edwards, P. (trans. & introd.), 1989. *Vikings in Russia: Yngvar's Saga and Eymund's Saga.*
- Pohl, F. J., 1972. *The Viking Settlements of North America.*

- Pulsiano, P. (ed), 1993. *Medieval Scandinavia An Encyclopedia*.
- Quinn, D. B., 1966. "The Vinland Map: I. A Viking Map of the West?", *Saga=Book of the Viking Society*, vol. XVII, part. I.
- Raudonikas, W. J., 1930. *Die Normannen der Wikingerzeit und Ladogagebiet*.
- Roesdahl, E., 1987/1991. *The Vikings*.
- Roesdahl, E. & Wilson, D. M., (ed), 1992. *From Viking to Crusader. The Scandinavians and Europe 800-1200*.
- Samson, R. (ed), 1991. *Social Approaches to Viking Studies*.
- Sawyer, P. H., 1962/1978. *The Age of the Vikings*.
- Sawyer, P. H., 1970. "The Two Viking Ages of Britain. A Discussion", *Mediaeval Scandinavia*, vol II. 1969.
- Sawyer, P. H., 1978. "Wics, Kings and Vikings", Andersson, T. & Sandred, K. I. (eds).
- Sawyer, P. H., 1982/1994. *Kings and Vikings Scandinavia and Europe A. D. 700-1100*.
- Sawyer, P. H., 1985. "Birka, the Baltic and Beyond", Lindquist, S-O. (ed).
- Schledermann, P., 1981. "Ellesmere Island Eskimo and Viking Finds in the High Arctic", *National Geographic*, vol. 159, no. 5.
- Seaver, K. A., 1996. *The Frozen Echo Greenland and the Exploration of North America, ca A. D. 1000-1500*.
- Shepard, J., 1974. "Some Problems of Russo-Byzantine Relations c. 860-c. 1050". *The Slavonic and East European Review*, vol. 52.
- Shepard, J., 1984-1985. "Yngvarr's Expedition to the East and a Russian Inscribed Stone Cross", *Saga=Book*, vol. XXI, parts 3-4.
- Shepard, J., 1986. "A Cone-Seal from Shestovitsy", *Byzantion*, Tome LV.
- Simpson, J., 1967/1969. *Everyday Life in the Viking Age*.
- Skard, S., 1976. *The United States in Norwegian History*.
- Skelton, R. A., Marton, T. E., & Painter, G. D., 1995. *The Vinland Map and Tartar Relation*.
- Smyth, A. P., 1974-1977. "The Black Foreigners of York and the White Foreigners of Dublin", *Saga=Book*, vol. XIX.

- Snorris Sturluson, *Heimskringla*: Laing, S. & Simpson, J. (trans & revised), 1914/1978. *Snorri Sturluson, Heimskringla The Olaf Sagas, vol. I.*
- Stang, H., 1983. "Russians and Norwegians-two self-appellations, one origin", *Scandinavian Journal of History, vol. 8, no.1.*
- Stein-Wilkeshuis, M., 1994. "Legal Prescriptions on Manslaughter and Injury in a Viking Age Treaty between Constantinople and Northern Merchants", *Scandinavian Journal of History, vol. 19, no. 1.*
- Stomberg, A. A., 1931/1970. *A History of Sweden.*
- Porsteinsson, B., 1962-1965. "Some Observations on the Discoveries and the Cultural History of the Norsemen", *Saga=Book of the Viking Society, vol. XM.*
- The Vinland Saga The Norse Discovery of America*: Magnússon, M. & Pálsson, H. (trans), 1965/1987.
- Wahlgren, E., 1982. "American Runes: From Kensington to Spirit Pond", *Journal of English and Germanic Philology, vol. LXXXI, no.2.*
- Wahlgren, E., 1986. *The Vikings and America.*
- Wallace, B. L., 1982. "Viking Hoaxes", Guralnick. E. (ed).
- Wallace, B. L., 1991. "The Vikings in North America: Myth and Reality", Samson, R. (ed).
- Wallis, H. et. al., 1974. "The Strange Case of the Vinland Map A Symposium", *Geographical Journal, vol. 140, part 2.*
- Westerdahl, Ch., 1995. "Society and Sail On Symbols as specific social values and ships as catalysts of social units", Crumlin-Pedersen, O. & Thyse, B. M. (eds), *The Ship as Symbol in Prehistoric and Medieval Scandinavia.*
- Whitelock., D. (ed), 1955/1968. *English Historical Documents, vol. I, c. 500-1042.*
- Wilson, D. M., 1962-1965. "Book Reviews", *Saga=Book of the Viking Society, vol. XM.*
- Wilson, D. M., 1970-1973, "Manx Memorial Stones of the Viking Period", *Saga=Book of the Viking Society, vol. XVIII.*
- Wilson, D. M., 1970/1976. *The Vikings and their Origins.*
- Wilson, D. M., 1970/1980. *The Vikings and their Origins.*
- Wood, I. & Lund, N. (eds), 1991. *People and Places in Northern Europe 500-1600 Essays in Honour of Peter Hayes Sawyer.*

- 『アイスランド サガ』、谷口幸男訳、一九七九年
- 『赤毛のエリク記 古代北欧サガ集』、山室静訳、一九七四年
- アルムグレン・B(編)、倉持不三也訳、『図説ヴァイキングの歴史』一九九〇年
- ブレンステッド・C、荒川明久・牧野正憲訳、『ヴァイキング』一九八八年
- コア・B、谷口幸男監修、『ヴァイキング 海の王とその神話』一九九三年
- デュラン・D、久野浩・日置雅子訳、『ヴァイキング』一九七九／一九八〇年
- ファーバー・G、岡淳・戸叶勝也訳、『ノルマン民族の秘密 バイキングの侵略と冒険』一九七七年
- グー・レウィチ・D、中山一郎訳、『ヴァイキング遠征誌』一九七二／一九七二年
- ジョーンズ・G、笹田公明訳、『ヴァイキングの歴史』一九八七年
- 『毎日新聞』、一九六五年十月十三日、夕刊
- マヴロージン・V、石黒寛訳、『ロシア民族の起源』一九九三年
- 大沢一雄著、『アングロ・サクソン年代記研究』一九九一年
- プルトナー・D、木村寿夫訳、『ヴァイキング・サガ』一九八一年
- 『ロシア原初年代記』、国本哲男他訳、一九八七／一九八八
- 『サガ選集』、日本アイスランド学会編訳、一九九一年
- シドロヴァ・N、他監修、阿部玄治他訳、『ソビエト科学アカデミー版 世界史中世二』一九六二年
- シン普森・J、早野勝己訳、『ヴァイキングの世界』一九八七年
- 谷口幸男著、『ゲルマンの民俗』一九八七年

▲附記▼

本稿は、文献の入手、閲覧に際して、とりわけ左記の方々、機関にお世話いただいた。記して謝意を表明したい。

Dr. Jonathan Shepard (University of Cambridge)、長谷川岳男・知(駒沢大学非常勤講師)、神田早穂(上智大学大学院)、北海道大学図書館、上智大学図書館、慶應義塾大学図書館、成蹊大学図書館、本学図書館。